

土

淨

號 月 八



昭和十六年五月廿日第一種郵便物
昭和十六年七月廿日印刷
昭和十六年八月一日發行

第七卷

第八號

陸海軍病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓二十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

毎日一球

お子さん丈夫で

親の苦勞は消え去る



財団法人 理化學研究所製品

一月量 (二圓)
三月量 (五圓半)
六月量 (十圓)

●本劑はビタミンA Dを多量に含んでゐますから、毎日根よくお子さんに服ませてゐると、メキ／＼丈夫に育つて行きます。

●小粒で、臭くなく、お子さんが嫌がらずに服みますから、毎日續けて服させるには、甚だ好都合です。

●いつもお腹をこわしたり、熱を出したり、風邪をひいたりする病弱なお子さんに最適の榮養劑です。

許特法製・國ケ一十界世

理研 ビタミン N 球



淨土八月號 目次

表紙・扉・目次カツト……………河村 良孝

滅私奉公の佛 教 美 術……………望月信成(二〇)

尊 き 因 縁……………吉田絃二郎(六)

趣味 筆 の 知 識……………脇本樂之軒(三)

人 生 遍 路……………和田 正系(七)

法然上人和歌註解……………安西覺承(四)

實話 妙 好 人 を 得 る……………千葉寛定(五)

或る病兵の手紙……………編輯部(六)

信 仰 相 談……………中村 辨康(興)

われらの覺醒……………福田有誠(語)



あゝ 老少不定……………花田順往(五)

歌壇……………與謝野晶子選(一九)

俳壇……………太田耳動子選(三)

柳壇……………西島○丸選(元)

浄土まん畫 暑中御見舞……………漫畫協團(三)

仔猫と女學生……………内山憲尙(四)

小説 無名の學者……………小島健三(三)

東海道島田の記……………子母澤寛(四)

聖典
講義

觀相のむつかしき

中村辨康(七)

會員通信……………(五)

編輯後記……………(六)

浄土八月號 目次

精神文化全集

新し修養と放養

全集 廿四卷 豫約募集

この全集は時局下の青年大衆に、父に、母に、工場に「ヨリ豊かな精神文化を」「ヨリ高い教養と教智」を「ヨリ新しい修養と處世のすべ」をのスローガンで現代日本の修養壇、精神文壇の各方面の代表的最高權威大家が總動員でその全著作中から會心の傑作代表的名著を選集し、又は書下しを輯めた、決定版選集で、各著者の化身であります

見よ！此權威！此網羅！

第一卷 井上哲次郎選集	第二卷 石丸梧平選集	第三卷 蓮沼門三選集	第四卷 秦賢助選集	第五卷 本莊可宗選集	第六卷 帆足理一郎選集	第七卷 友松圓諦選集	第八卷 大倉邦彦選集	第九卷 加藤岫堂選集	第十卷 高嶋米崎選集	第十一卷 高神覺昇選集	第十二卷 谷口雅春選集
第十三卷 鶴見祐輔選集	第十四卷 永田秀次郎選集	第十五卷 室伏高信選集	第十六卷 上野陽一選集	第十七卷 桑木嚴聰選集	第十八卷 倉田百三選集	第十九卷 武者小路實篤選集	第二十卷 山田忍三選集	第二十一卷 小林一郎選集	第二十二卷 江原小彌太選集	第二十三卷 三宅雪嶺選集	第二十四卷 下村海南選集

戦争文学傑作集

堂々十四巻既刊！
明治大正昭和の戦争文学名
著の全的網羅各巻四六七百
頁豪華本 各巻二圓八十錢
進呈

絶讃の嵐！

怒濤の申込！

各巻大增刷成る！

待望已久
第三回配本

友松圓諦選集

近代的鋭敏なる感識と知性を以て眞理を人生を究明し説く氏の五大名著を選集し書下し三篇を収む。

第十五回配本

谷口雅春選集

歡喜の人生觀、精神生活の至上道、人生に處世に必勝するすべを説く。氏の全著作の要約及發表協稿の決定版。

第十六回配本

室伏高信選集

新鮮潑刺たる東洋的新思想、彼の雄叫びとしてその二大代表作「改訂版青年の書」と「新譯語」を収む。

☆ ☆

先づ全國書店で現本
一覽乞品切れの時
は發行所へ注文乞

一、全國書店へ申込の事
二、全廿四巻豫約定價二圓全錢
單册分賣定價一圓九十錢
但豫約者へは優先配本す

内容見本
東京市小石川區小日向臺町
振替東京一七四四三番
申込次第進呈す

潮文閣

淨土

念佛の興行は愚老一期の勸化也。されば念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がともやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし。

法然上人御法語

八月號





尊たふと き 因いん 緣ねん

吉 田 絃 二 郎

因緣いんねんといふ言葉ことばはまことに尊たふといふ言葉ことばである。人ひとが人と逢あひ、人ひとを知り、しかもそれがやゝもすればその人ひとの一生しやうを支配しはいすることになる因緣いんねんもある。さういふことを考かんがへると、一日いちにち一日いちにちの生活せいかつは恐ろしいことでもあり、うれしいことでもある。今日けふどんな未知みちの人ひとと知るやうになるかも知れない。そしてそれがわたくしの明日あすに何のやうな關係くわいけいを生み出すか知れない。未知みちの人ひとに逢あふといふことはすくなくともわたくしたちの明日あすの運命うんめいに多少の因緣いんねんを持つことになる。

かつて信じ合あつた人ひとが人ひとを殺ころすやうな場合ばあひ、信じ合あつた男おとこがその愛人あいじんを殺ころすといふやうな場合ばあひを考かんがへると、まことに悲しい因緣いんねんである。恐ろしい因緣いんねんで

ある。こんなことを思ふと人は永遠えいゐんに孤獨こどくな方がよいといふことになる。

ダンテは或る日偶然ひやうぜんにも街まちを歩いてゐて少女せうじよピアトリチエを見みた。ピアトリチエの美しい姿すがたはダンテの一生しやうを支配しはいした。かれは一度ピアトリチエを見みたために、魂たましひを瘦やせしむる人間的にんげんてきな苦惱くなうを知らなければならなかつた。その點てんから考かんがへるとピアトリチエと逢あつたといふ因緣いんねんは不運ふうんの基もとであつた。

けれども、若もしかれがピアトリチエに逢あはなかつたとしたら伊太利イタリヤの文藝復興ぶんげいふきこうを象徴しやうていするところの大作家だいさくしや「新生しんせい」は生うまれなかつたにちがひない。

ピアトリチエを見みたことはこの上もない悲しみの因緣いんねんであつただけに、その反面はんめんに於おいて無上むじやうの因緣いんねん



であつた。

富貴をめぐまれた人々は生活の幸福に充たされるであらう。しかし富貴なるがために人間的なわづらひに悩まされることも多いであらう。樹下石上を宿としてゐる人の生活は一番氣易いものであるにちがひない。けれども富貴にゐて貪らず、迷はず、從容として死を待つ人もないではない。因縁を正しく解し、正しく生きた人である。

樹下石上の生活に入りながら、死を恐れ、世俗の欲念に惑ふ者がある。因縁をありがたく生きること知らないからである。

×

法然上人のやうなお方でも住蓮坊を知つたこと

を、淨土門に逢ひたてまつたことと同じく、この

世に生まれ來た甲斐あることと言つてをられる。法

然上人から見れば住蓮坊といふ人は年も若く、學問

才藝もはるかに見劣つた人であつたらうが、法然上

人は住蓮坊をあれほど尊いものに見てをられる。

尊い因縁である。法然上人の御目は、普通の人に見

えない尊い因縁を一雜僧の裡に發見されたのであら

う。

キリストが復活した時、キリストを見たのはマгдаラのマリヤたゞ一人であつた。マгдаラのマリヤは唱婦である。尊いナルダの油でキリストの足を洗つた篤信の女である。マリヤも亦因縁を尊く生きた女である。

尼連禪河の女がもしその朝河のほとりに行かなかつたとしたら、かの女は釋尊にお目にかゝる機會を永遠に失つてしまつたかも知れない。またかの女がたとひ釋尊を拜んでも貪慾な女であつたとしたら、釋尊に牛の乳をさしあげるといふありがたい因縁も結び得なかつたであらう。

因縁は恵まれるものであると同時にわたくしたち自身の心で生かしもし、殺しもすることのできるものである。尊い因縁を尊く生かすために心の準備が大切である。尊い因縁に接するためには自分の心を洗ひ淨めて置く必要がある。

法然上人を乗せた御舟が室の津にかゝつたことも尊い因縁である。室の津には幾百の遊女がゐたにちがひないが、この尊い因縁を尊く生かしたのは、た



だひとりの遊女のみであつた。あの女には心の準備があつたからだ。

因縁は黎明の静かな風のごとく来り、風のごとく去る。夜を徹して 暁を待つ人にのみめぐまれる。

×

かつて鹿兒島に行つて、西郷南洲翁を見たといふ老人に逢つて、うらやましく思つたことがある。

かつて佐賀に行つて、江藤新平を知るといふ老人に逢つて、その老人をうらやましく思つたことがあつた。佐賀の城が落ちる時、江藤新平は二日二晩刻に知らして来る、味方不利の戦況を聞きつゝ静かに孟子？を讀んでゐたと、その老人は語つてゐた。

いつの間にか自分たちが若い人々に羨まれる年配に達したことを思ふて多少の感慨に耽ることがあるわたくしは乃木將軍とは二度逢つた。一度は戸山ヶ原で、そして一度は九段の偕行社で。

九段の偕行社で將校團の乃木將軍歡迎會が開かれたのは明治四十二年の四月の十日であつたかと思ふ。將軍は宮殿下の御伴をして英國へ行かれることになつたのであつた。乃木さんはその時めづらしく

興奮してをられたやうに見えた。それは當時軍務局長だつた田中義一少將(後の大將)が新たに改正された軍隊内務書のことと言及して「昔の軍隊は家庭的でなく、嚴格そのものであつた」といふ意味のことを述べたのに對して、その日の主賓である乃木さんは起ち上つて「必ずしもさうではなかつた。嚴しい中にやさしいものがあつた」といふやゝ反駁めいたお話であつた。傍には山縣元帥はじめ日露戦役の元帥連も列席してゐて、空氣がちよつと妙になつたやうに感じられた。それから乃木さんはわざ／＼わたくしたち青年士官の席へ來られて一人一人に酒を掬んでくれられて、何かと激勵された。

乃木さんの聲はすこしかすれて、寂びてゐた。その乃木さんの聲は今日でもなほわたくしの耳に鐫りつけられてゐる。

また迎火を焚く日が近づいて來た。

孟蘭盆が近づくとにわたくしは迎火を焚いて亡き人を守つ日本に生まれたことをありがたく思ふ。

孟蘭盆は日本の宗教であるとともに日本人の詩である。最も純化された生活詩の表現である。

歌壇

與謝野晶子選

中支派遺事 湯原弘道

珍らしくかしこと結ぶ文來ればわ

が妹の齡ゆび折りかぞふ

わが妹と云ふのは妻を指すのか、妹を云ふのか、いづれにしてもこの作者の遠征の月日の長いこと、その嘆息をぢかに聞く思ひのする佳作である。

北海道 伊藤 恒子

ふと見れば見なれし道にも春は來

てはつと眼をつくたんぼほの花

作者は見なれたものから新しい姿を發見して眼をつかれた形である。いつも通りなれた知り切つた道で、何の感興も湧かないところであるけれど、しばらくぶりに外出して見ると、まあ何とたんぼほの花盛りで、自然はこんなに新鮮であると驚いてゐる。

東京 押野 尚秀

水涸れし河の底とも見まほしき都

大路を歩むわりなき

この作者は都大路を歩き乍ら、その都を美しいものとなつたかといふも感ぜない、却つて水の涸れた河を見るやうな無味乾燥なあつちなさを感ぜてわびしんでゐる都の中には人の心を

あたためうるほす何者もないことを暗示してゐる。

東京 無名子

杖をもて花の長さを計り見ぬ紫

包ふ藤棚の下

近江 美船横笛子

參籠の身に惱の多かりき鉦打ち

つつも心澄み得ず

東京 川田 邦彦

實彈射撃の砲聲遠く聞ゆなり細雨

けふれる我家の庭に

東京 船津 定祐

ふたたびの試歩許されて新らしき

希望湧かな夏をつぐる日

静岡 一向 山人

諸手もて花をまゐれば御像は厨司

の奥處にはほえみ給ふ

三重 大野 歩行

いつはりもたくきもあらず一すぢ

にかたく誓ひし君とわれかな

東京第二陸軍病院 荻野 一雄

注射すと腕に巻きたるゴム紐の冷

たく沁みる朝の療室

高知 竹島 渡波爾

ふと覗く鏡の中のわが顔のおどけ

しをみて心さびしむ

長野 丸山 力圓

生業にひたぶるとなりこの秋は精

神いささか揃きもあらず

北海道 中村 もん

うねり續く山峽ゆけば夏ながらこ

こは辛夷の花盛りかも

北海道 平井 正念

壁の繪のやうに變らぬ衣物着て子

等いつくしむ父母の尊し

青森 丸尾 傳山

降るにつけ晴るるにつけてなく蛙

なくより外に術を知らぬや

新潟 北原 竹香

忘念の絶間なき身にありながら大

悲の御手に洩れぬ嬉しさ

北海道 寺田 頑山

あな嬉し愚の我れをたすくべき彌

陀の本願なると思へば

青森 高松 英紀子

出征日萬事頼むと我れに云ふ弟を

持てる幸をよるこふ

長野 下平 武志

うつり行く時の好みも見ゆるかな

衣かへたる里のをとめに

神奈川 河上 隆吉

新緑に蒸す院庭の丘に來て暇ある

身を文讀む吾れは

京都 齋藤 耕善

嵐山に舟を浮べて夕暮れを孤り淋

しく水と語らん

大阪府 山北 隨光

夕暮や春雨にぬれ庭の端に白き花

びら土に落ちゆく

茨城 眞木 謙太郎

日毎見る戦死の人の寫し繪に黙し

て下げぬわが頭かな

東京 細田 初枝

大いなる母の慈愛に泣きぬれてわ

れは供へぬおくつきの花

栃木 大崎 清

大御代を新聞に知り奮ひたつ心と

なりて畑に鋤とる

福島 瀬谷 靜山

晩霜に焼けたる桑の多けれど残り

集めてなほはげまばや

投稿規定

はがきにて一回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係あてに送ること。



滅私奉公の佛敎藝術

望月信成

日本の藝術を研究するものが誰れでも必ず心細く感ずることは日本人があまりに日本藝術に對して無關心であることである。それは我が國が非常に恵まれてゐて、自然の景色は四季を通じて常に美しく且つ古代の美術品は至る所にころがつてゐて何時でも無限の美を放つてゐるから、更めて事新しく美術などと稱して見かへる必要がない爲めであるのに外ならない。そののみか日本の美術と云へば近世を除いては殆ど全部が佛教美術であつて、

いづれも信仰の對象で無いものはない所から若しこの禮拜の本尊を批評して、美的内容があるとか無いとか云ふことはむしろ本尊を冒瀆するものと考へ、それは罪深いこととし、無條件に排斥したものであつた。である

から日本の古美術の研究は從來少しも發達しなかつた所以である。否むしろ古美術どころかこれに對する常識すらも日本人にはないと云ふても過言ではない。

よく私等に「この佛畫は誰れの作でせうか」又は「この佛像は惠心僧都作と云ふが本當でせうか」などと云ふ質問を屢々受ける。このことは日本の佛教美術を一寸でも知つてゐる人は直ちに解る所であるが、それが百人中九十九人まで知らない現状にある。

日本の古代美術の作品——佛像でも佛畫でも——は作者や製作年代がはつきり解つてゐるものは殆どないのである。

このことは考へ様によればどんな立派な繪を描いても、素晴らしい彫刻をこしらへても全

く自分が作つたと云ふ印を入れずに平氣でその作品を世間に出したものに外ならない。云はゞ文字通りの滅死奉公である。現在の藝術家は非常に自尊心が強く自分で作つた作品を他人のそれと嚴然と區別を附けやうと必ず作者名を入れるが、古代の佛教美術品にはこのいまはしい競争意識は全くなかつた。佛菩薩の爲めに自己を犠牲にして専心の奉公を續けて來た。それであるからあの美しい素晴らしい藝術が生れ出たのである。

現在のいかな展覽會や陳列にでも昔の優秀佛畫よりも優れた作品がならべられてゐたことを見たことがない。それ程古代の佛教美術は技巧的にも内容に潜在する精神的にも素晴しさが存在してゐるにも拘らず、作者や筆者

は自分の名を記載しないで平氣であられたのであるから、その奥ゆかしさは吾人の筆端に書き盡すことは出来ない。今時藝にしたくもかゝる奥床しき作家があるであらうか。

藤原時代から鎌倉時代にかけて我が文化史を檢討して見るとかなり個人主義的傾向が見え、佛教に於ても祖師を中心とした宗派が擡頭して來た。例へば法然上人を中心とした教團では法然上人の御影堂を伽藍の中心に置き從來の本尊阿彌陀如來像は却つて脇堂の方へ安置さるゝ伽藍配置——知恩院や木願寺等の如き——を見る時、祖師その人を教團の中心に置いて、人間そのまゝの姿を見せやうとした新傾向を見出すことが出来る。か



かる祖師中心思想はやがて佛教美術にも影響して多少自己の製作を明記しようとする傾向が生じた。それは多く佛像彫刻に於てである

が、しかし作者名を記載するにも決して表面から見える所へは書かずに、佛の胎内とか臺座の裏とかへ書くのが普通である。しかしこれとても百體のうち一體位の割であつて、矢張り依然として滅私奉公が續けられて來た。餓虎に身を投げ給ふた王子の話や法の爲め自分の身を犠牲にした本生譚等の一節を讀む

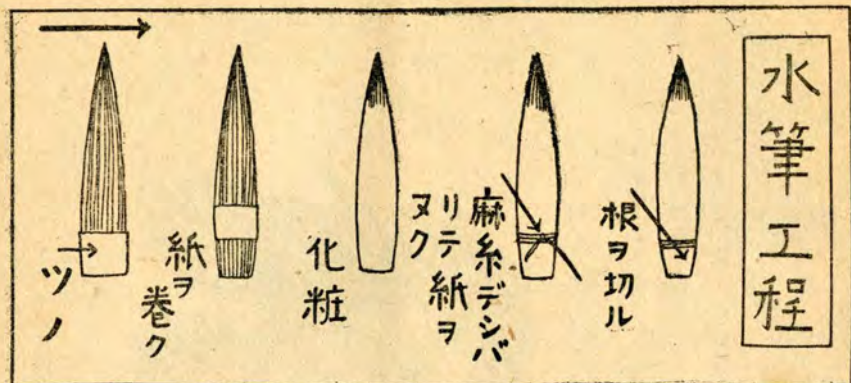
たびにこれと同様の滅私的行爲が古代の藝術家には屢々あつたことを知り、よく菩薩行を修して、奉公したものであると眼頭の熱くなるを覺える。我田引水ではないが、古代美術を研究するとこんな面白い研究題目が澤山あつて、今迄世人のあまり氣のつかない幾多の注意すべき事實がわかり、日本文化史や佛教史等に貢獻する所が多いものである。

今や未曾有の非常時に直面してゐる現在かかる意味で日本の古美術を再檢討する事も決して無駄ではなく、古代に於て佛教美術が國民の精神方面にいかに大きく働きかけてゐたかを知つて、再び今時の非常時に處すべき國民の覺悟を決定するのにもあながち無益なこととは考へられない。

特に最近の傾向として新東亞建設にいつても佛教關係の事業が等閑に附せられてゐることを思ふ時、我が佛教徒は乾坤一番奮起すべき時ではなからうか。

(寫眞は國寶不動明王座像、京都廣隆寺)

水筆工程



筆の知識 (下)

樂之軒生

筆の名どころ

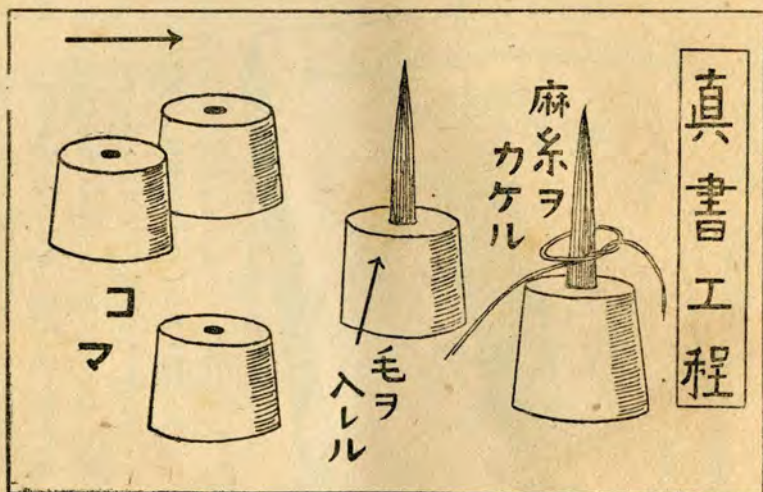
文房具に限らず、すべて工藝的な物の話をするには、先づ部分／＼の名稱を知つて居る必要があります。硯の水の溜る所を「海」と呼ぶやうなもので、斯ういふ風な名稱のことを、古くは「名所」と申しました。それならば筆の名所如何にと云へば「軸」と「穂」、この二つは今更説明を要しませぬが、穂には「命毛」「心」「喉」「肩」「胴」「すげ込み」など、所々に應じた名があります。命毛と云ふのは穂先のこと、俗に命毛の壽命が短いとか長いとか申すのは、毛の善悪によつて穂

が長い間使へるか使へないかのことを云ふのです。筆の職方の人達は命毛のことを「野毛」とも云つて居ますが「齊尖」と云つて、この命毛が巧く揃つて錐のやうに鋭く尖つて居ることが筆の第一要件です。この五月の初め頃であつたと記憶しますが、小石川後樂園の瀧徳亭に東京の筆屋さんや名人と云はれる職方の人達が集つて昔語をすると云ふので、私も傍聴に出かけましたが、其時の話に「昔は手、今は毛」と云ふ意味のことが話し交されて居ました。如何いふことかと云へば昔は毛がよかつた、例へば同じ狸の毛でも信濃や越後の狸などは非常によいもので、少々仕事かわる

くても筆が使へたが、近頃は養殖狸の毛などしかないから、餘程腕が無くては使へるやうな筆は作れぬと云ふ意味ださうで、命毛の揃へ方などますますくむづかしくなつた譯でせう。

心は中心、即ち穂の中味で、この心の先が命毛であることは、常識的にすぐ考へられませう。喉と肩とは命毛から下、胴は穂の太い部分、それから軸の中に隠れて居る「すげ込み」の部分となるわけですが、すげ込みと云ふ言葉は如何にも職方らしい用語ですから「根」と呼びかへても宜しいでせう。支那製の筆と日本製の筆とを使へ分けられた方は能く御存知でせうが、支那製はとかく穂がガツクリと軸から抜け易いですね。あれは松脂か糊などを用ひてすげ込んで居るからで、日本製の方は漆を使つて居るから抜けないものです。

筆の作り方（準備）



筆を作る職方が前に述べた毛の間屋、即ち毛屋から毛を吟味しながら買つて來ると、ま

づ「毛採み」と云ふことをします。この毛採み、布もみ、革もみなどの區別がありますが要するに癖直しをするわけで、その時米の粃殻を焼いた灰をまぶして揉むのは毛の油毛を去る爲めでせう。尤も毛はすべて二三時間以上も煮てありますから、消毒もチャンと出来て居るわけで、毛採みは癖毛直しと一概に申して差支ありません。筆の職方にならうと云ふ小僧さんは、まづこの毛採みをイヤといふ程やらされるわけで、始めは掌の平が眞赤に膨れ上ると申します。

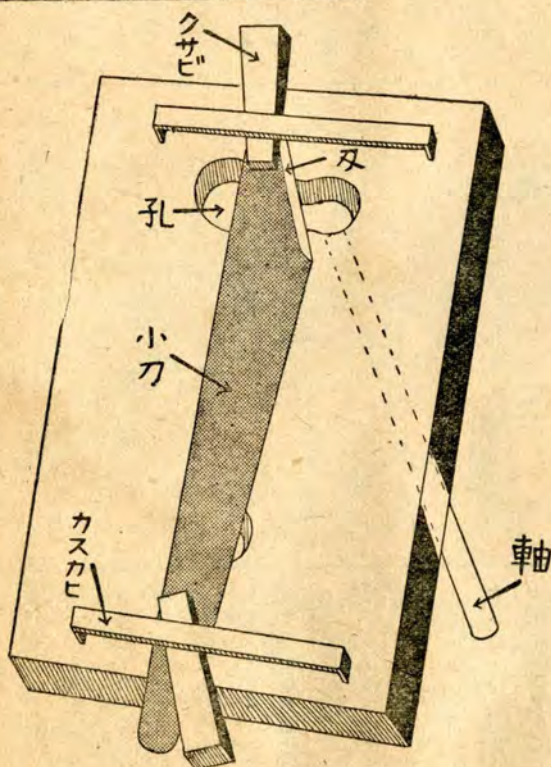
毛採みした毛は綿のやうに入り亂れて居ますからこれを適宜の量ほどつまみ上げて、カルタを切るやうにして、後先を揃へます。これをタグルと申します。手繰つた毛は更に櫛を用ひて長いだけを抜き取る、これが「櫛抜き」で、この時「倒毛がへし」も自然に出来るわけですが、今度はそのあらまし揃つた毛を「手板」と呼ぶ小板に打附けくして、一層揃ひをよくし、更に小刀の刃をいためたので繰返し／＼揃るやうにすると、いよ／＼

毛が立派に揃ひます。小僧さんが一人前の職方になるには、こんな仕事も一年位は修業する必要がありますと申しますが、この櫛抜きに用ふる櫛の齒は粗いのも細かいのもあり眞鍮又は洋銀で普通作られて居ります。

筆の作り方(本仕事)

櫛抜きまでは云はゞ値打のない仕事で、小僧さんにも出来ませんが、それから先はいよいよ本職でなくてはむづかしい仕事になります。即ち櫛抜きによつて大體に揃つた「バラ毛」を馬の毛は馬の毛、羊の毛は羊の毛といふ風にそれゝ適量だけ取つて、もう一度小刀を用ひて、命毛の切れて居る毛、癖のある毛など、綿密にあらためて抜き捨

と形のなんか



て、それから「調合」即ち平たく云へば「混ぜ」にかゝるわけですが、水筆と眞書筆とでは大いに様子が違つて居ます。まづ眞書筆から申すと六七分七八分、或は一寸と長さも種類も違つた、三通なら三通の毛をまぜて、薄平たく延べたものを片端から數十本づつ分けて取り、これを「コマ」の孔に挿込んで置いて、

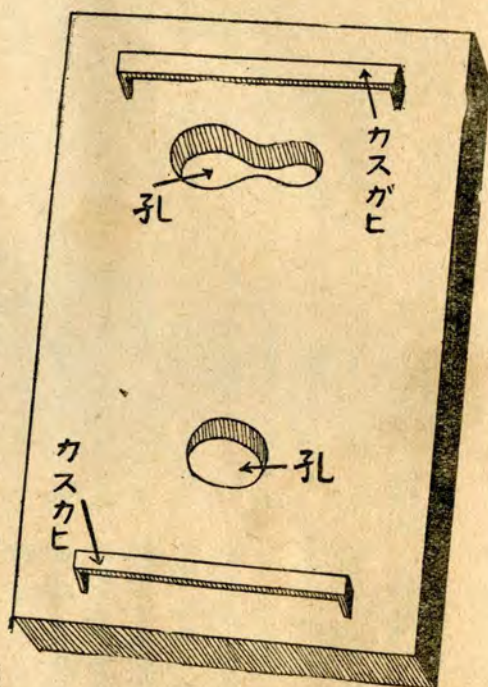
て、その根元を麻糸で結び取る。これを「コマ結び」と云ひますが、それならばコマは如何いふ形のものかと云へば、圖に示したやうに筒形で、中心に孔があり、大抵は蠟石で出来て居ますが要するに重い材料なら何で作つてもよいわけでせう。

水筆となるとなかなか斯う簡單には参りませぬ。まづ毛も五六種は混ぜるのが普通で、例へばまづ鹿の毛と狸の毛を混ぜ、次に二分位短めな鹿の毛と羊の毛を混ぜ、更に一旦これを結んでから所謂「化粧」として馬の毛又は栗鼠の毛を表面に被せると云ふ風で、眞書筆の場合の「コマ」と違つて、「ツノ」と呼ぶ水牛製の輪の中に入れて、根を揃へ、そ

の根元に紙を巻いて形を整へて置いた上に、例の化粧毛を巻き添へ、麻絲で縛つてから、小刀（ハンサシ）の先を入れて紙を拂ひ去り、さてその「ハンサシ」で縛られた根を短く切るのですから、眞書筆が一日に普通一人で二百本出来るに對して水筆の方はせいゝ五六十本ですから工程の複雑さが想像出来ませう。

使用法

（小刀）おほよそ穂の形を整へてから、更に絹絲の一端を口にくはへつゝ、穂の根本に絲を輪にして掛け、漸次絲の輪を上方に迂らせ、フノリをすつかり絞りと取ると同時に、また今一度形を丁寧に整へ、これでやつと仕上げが出来て、丸一日天日に乾かし、あと半日蒸干にして、これで漸く一本の筆が出来上ります。私共が筆作りの作業を見て感心するのは、その仕事の細かく職方の指先の器用を極



すまい。云ふものは、並大抵のものではありませぬ。勿論熟練と云ふものは恐ろしいもので、私共が見てこれは大變な仕事だと思ふことも「心手相應する」即ち思ふに手が働く名工の域に達した人達に取つては、それこそ朝飯前の仕事かも知れませぬが、そこまで上達するには非常な勉強を要することは申すまでもありません。

軸 附 け

めて居ることですが、

見學後の感想如何にと問はるれば、「一本の筆も決して粗末にしては濟まぬ」と云ふ心持に打たれた御答へする外はありませぬ。私が今工程を説明しましたのは、ただ重なる過程をざつと申し上げたと云ふだけで、その間の職方の細心の工夫或は苦心と

「軸附け」のことは後で申すと云ひましたが軸は普通竹で、その竹は東京では上總産の「白竹」を用ふるのが普通で、若しこれを斑竹風の洒落たものにする場合は斑の形を硝酸で焼けば宜しい。ところで軸作りの道具如何と云へば、これも道具は至極簡單で、一挺の小刀と鉋とがあれば宜しい。尤も鉋は普通の鉋と違つて、圖の如く一枚の小板に二タ所孔を開け、その孔の近所に鉋を打附け、その鉋の間に小刀を潜ませ、楔で留めて、任意調節して、小刀の刃を使ふわけでその小刀の刃の覗く部分は、孔が圖中の×の如く張り出して居る譯です。この張り出されて居る孔へ小板の裏から軸ののぞかせて切つたり、削つたりするわけで、簡單ながらも能くも此様な便利な道具を案出したものと、つくづく感心いたします。

しかし鉋は今も申す通り主として軸を切り、切つた切口を綺麗に浚へる爲めに用ふるだけで、軸の最上部に「面」を取るとか、又は穂が抜けにくいやうにする爲め軸端に内面

即ち「クリ面」を取るとかの場合は、指先と小刀とだけの作業で鉋は用ひませぬ。表面の「面」には「切面」「中面」「深面」などの種類がありますが、要するに面が直角に取つてあるか、斜か浅いか、深いかの相違です。面白いのはクリ面の作業で、此時職方は右手に小刀を、左手に軸を持つて居ますが、目にも留まらぬ早業で、又しても私共素人はホツと深い溜息の出るのを禁じ得ませぬ。

以上でざつと筆の智識を記し終りましたすべて斯う云ふ職人畫風の事柄は百聞一見に如かずで、如何ほど説明しても十分呑込めるものではありませぬ、そのくせ一度實地に作つて居る所を見れば、すぐ全體がわかる性質のものであるから、心ある方は筆屋さんで尋ねて職方へ見學を申込まれたらよいでせう。職方は毛の選擇から穂作り、軸作り、軸すげ、この數過程を一人でするのですが、唯だ「今古才人」「山陽外史」など、軸に銘を彫る、或は漆で書く、これだけは分業となつて別々の専門の職方の手に委ねる習慣になつて居ると

申します。支那の筆と日本の筆とどちらがよいかとか、筆の選定法とか書けばいろ／＼ありませうが一先この邊で話を打ち切りませう。呉れ／＼も申したいことは日本人である以上は筆に親しみを持つて戴きたいことで、その意味で昨年東寶映畫が「毛筆」と云ふ文化映畫を製作した時も一寸關係したわけでありました。明治畫壇の指導者として橋本雅邦と併稱される狩野芳崖が、嘗て人に語つて、若し僕が畫をかつて居る時、人が僕の持つて居る筆を切つたら、その切口からポテ／＼と僕の熱血が逆るであらうと云つた逸話なども、面白いではありませんか。澤山の職方を使つて筆を吟味する筆屋さんの眼には、これが若い人の作つた筆か、それとも老人の作つた筆か、一目で見分けが附くと申します。皆さまでも吟味して筆を選んで下さい、使ふ人の眼が肥え腕が冴えれば、それに従つて筆もいゝものが出来きます。萬年筆ばかりを皆が用ふるやうになつたら、千有餘年の歴史を此國でもつ筆も墮落する外はありませんまい。



人生遍路

和田正系

私は先達て、ふとある裏町の道具屋から一つの金剛鈴を買つて來た。それは柄の先が五本に分れてゐる所謂五鈴鈴といふ種類のもので、可なり大ぶりなのである。手にとるとどつしりと重くて、黄銅の金質はもうすつかり黒ずみ、奥幽しい鈍い光澤を放つて居るところは、餘程長い間人の手に觸れて來たことを思はせる。

私はその鈴を机の片隅に置いて眺めた。鈴の胴には割合高い帯が上下に二本付いてゐる。頂には八葉の蓮瓣、その中央に蓮瓣と鬼目とに裝飾された把が立ち、先端は一本の鋒を圍んで四方から四本の鈴が彎曲してゐる。中々好い形である。私は讀書に疲れた時、又は習字の間の一休みに腕を延してその五鈴鈴を把つて軽く振つて見る。チリンチリンと落ついた、けれども爽やかな響きが靜かに室内の空氣を振はせる。二度三度、今度はやゝ強く振つて見て次々に起る高い音に耳を澄して聴き入るのである。窓の外には朝から梅雨の雨が小止みもなく降つてゐる。重なり合つた梅の青葉を濡らして音も無く、降りそぐ雨、鈴の響きは幽

かにその濡れた青葉の繁みに消えて行く。私の頭にはさまざまの想ひ出が充ちられて、鈴を持つたまま暫し茫然と植込のあたりを見るとも無く眺めてゐるのである。

この鈴の音を聞くに先づ何よりも巡禮のことが思ひ出される。四國のお遍路さんと思ひ出すのである。

X

私は天保十年に書かれた四國八十八箇所遍禮日記を持つて居る。これも或る古本屋の棚の隅で埃にまみれたものを見付けて來たのである。遍路日記では近くは高群逸枝女史のものなど興味深い、之を又古い天保時代の手記と對照して見ると一層面白いのである。

天保十年と云へば世は徳川の泰平期ながら、その少し前の七年には大饑饉があり、八年には大鹽平八郎の亂があり、十二年には水野忠邦の改革ありといふ譯で、時の流れの何となく陰鬱な豫感のされる時であつた。

この遍路日記を認めた人は武藏國横見郡下吉見領、柚澤村の大澤藤輔といふ人で、たゞ

一人で遙々四國迄行つて遍路をして來て居る。如何なる願があつたのか、その目的はよく分らないが、兎に角天保十年二月七日備前國西大寺から船に乗つて同夜讃州丸龜に着き、翌る八日、七拾五番の善通寺より札打ち始めてゐる。而して之から順に八十八番の大窪寺迄行つてから、一番の靈山寺に返り之より順に七十四番の甲山寺に至つて札打納めて居る。日記の最後に之をまとめて、

「天保拾年亥二月七日夜九時丸龜着船仕、八日朝四時丸龜東濱龜屋金兵衛殿方出立、金毘羅參詣仕、其より善通寺へ二里札初め而、金藏寺へ行、巡に札打、三月六日朝五時甲山寺にて札打納其より御禮として又善通寺に參詣仕、金毘羅參詣仕候、右宿丸龜東濱龜屋方に參候以上」

とある。日々の泊りの事、はたご賃や舟賃迄も記し、それから

「森山村御攝待、御飯御汁付」
「坂村、豆いり御攝待被下候」

「峠下りてしをうじ村にて餅二切御攝待」等と毎日のやうに記してあるのを見ると微笑しくなる。この日記の表紙には同行二人と書いてあるが一人は勿論大師様で、一人旅であつたことは四國御番所へ差出した手形の寫しに「武藏國横見郡柚澤村藤助一人」とあるのでも明瞭である。四國遍路にゆつくりすれば二ヶ月、三ヶ月かゝるそうであるが、この人は丁度一月でやつて居る。この時代に武藏の國から一人で遙々四國に下り、一ヶ月で遍路を終るといふことは冗談や遊山氣分で出来ることではなからう。この人はどういふ人であつたか、どんな事情で遙々お遍路に行つたのか。百年も昔の、かうした縁もゆかりも無い遠い國の人の旅日記が、何處をどう廻つて來たか、今、房州にある私の手に入つたといふことは、考へて見ると實に感慨が深い。

X

巡禮やお遍路さんは鈴を鳴らしながら行く。「阿波の鳴門」のおつるが唄ふ巡禮歌は聴く人の涙を絞らせるが、あの時鳴す鈴の音は

單純の樣でありながら、忽ちに私共の心を纏溺として遠い昔に返へらせる。あの鈴を聞くと思ふに、十郎兵衛やお弓の時代の人になつて了ふのである。

だが、私の買つた鈴は巡禮やお遍路さんの持つ鈴では無いらしい。矢張りお寺さんか修験者の持つたものであらう。五鈴といふのは密教の方で使ふばかりだと思つたら、禪宗でも使ふそうである。懇意な臨濟の坊さんにこの鈴を見せたら、「これは中々良いものがお手に入りましたね」と云つて、臨濟宗僧堂の玄關では、この鈴を鳴しながら草駄様様の前でお經を誦するといふ話をして呉れた。

坊さんは袈裟文庫を肩に托鉢をして廻つた時のことを話した。樹下石上、行方を定めぬ雲水の生活は、或時は食事も得られず空腹をかゝへて山から里に下つた。或時は宿を頼むべき家も無く山間の樹下に一夜を明した。然しほのぼのと東の空が白んで眞紅の日の出を拜んだ時は空腹も疲労もうち忘れて元氣百倍し、いそいそ山を登つたといふ。猿の聲や鹿

の鳴く音を聞きながら闇黒の山嶺に寒い秋の一夜を明したこともあつた。そんな話の末にかういふことが語られた。

「雲水の旅で、今日は何處まで行かなくてはならぬとか、今夜は何處で泊らねばならぬとかきちんときめると、非常にあせる氣持が出て、直きに疲れて了ふ。そういう旅は長続きがしない。どこでも良い、足のつゞく限り歩いて、而して日が暮れた所で、山の中でも谷の底でも泊るつもりであれば、非常に氣が楽で、修業が楽しくなる。」と。

私は坊さんとの間に置かれた鈴を見ながら、この言葉に實に味はひ深く聞いたのである。

×

人生は所詮は巡禮だ、遍路だ、托鉢だ。

無限の修業を目指して、足にまかせて歩んで行くのだ。許された生命のある限り、この世の修業をつゞけるのだ。どこで良いといふ切りは無い。然し又、何處で終つても良いのだ。われ等肉身の命はたとへ、いつかは消え

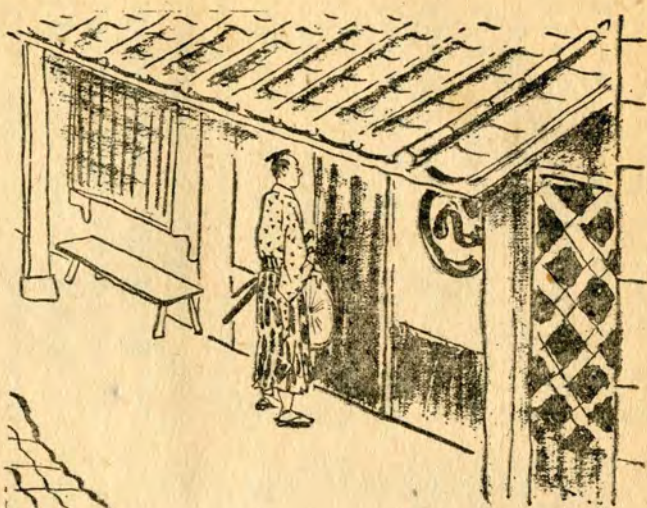
ても宇宙の生命の中に、懇々狭い區切りをつけて自ら苦しんで居る。どこで泊らねばならぬといふ定めはない。日が暮れた所で眠れば良いのだ。足が疲れたら休めば宜しい。金持にならねばならぬといふ規則は無い。利口にあらねばならぬといふことも無い。愚かな者は所詮は捌口になれぬのだ。貧しく生れつゝた者は結局は貧しいのだ。勿論なれる人は大いになるのが宜しい。

われ等は唯無限の遍路をつゞける。修業の旅路を歩む。

御供養を澤山呉れたら有がたく頂戴すればよい。然し少くとも有がたいのだ。呉れなくても、もともとなのだから。豆いりのお攝待が、お赤飯のお攝待かはこちらの預り知るところではない。

旅路は無限だ。楽しみも亦無限だ。同行よ、語りつゝ行かう。あのいゝ鈴を鳴らしながら。

(二六・六・一一母の命日に)
(筆者は富浦海濱學校長、醫學博士)



小説 無名の學者

小 島 健 三

識 だ か 振

ある夜、洛東岡崎の旅館に、一人の青年が訪ねて來ました。落頭垢面といふ言葉があり

ますが、まつたくこの青年のため
に出來たやうな言葉です。そのみ
すばらしい青年を見てゐました番
頭と女中が、何うしたものかと顔
を見合せますと、その青年は、胸
を張つて、
『實は小澤蘆庵先生を訪ねて來た
ものだが、時刻が遅くなつたの
で、一夜の厄介になりたい』

と、いふのです。

小澤蘆庵先生といへば、すぐこの近くに閑
居してゐられる大學者、その先生を訪ねて來
る位だから屹度偉いお方に違ひないと、思つ

たものですから、部屋へ案内しました。

その青年は、小さな包を持つてゐたが、部
屋に案内されると、その包を解いて中から書
物を出して夢中で讀みはじめました。

『お仕度は何う致しませう』

と、女中が尋ねると、不審さうな面持で、

『お仕度で何だ』

と訊きます。女中は口元に込みあげて來た

爆笑を袖でおさへて、

『あの夕飯のことでござります』

『夕飯、夕飯なら喰はん』

投げるやうにさう云つて、讀みかけの書物
に眼をうつしました。いや、確に變つてゐる

お客さんだと、女中や童頭たちは噂をしてゐました。

青年が、圓に這入りました。すると、その圓の近くにある座敷で、よくある識つたかぶりの若侍が、楠正成を論じてゐます。

『忠義には相違ないが、しかし、唐土の諸葛孔明に比べると、正成はまだく分別が足らん。度量も狭いし、人物だつて小さい』

と、一人の侍が誰はぐからずやり出しました。すると、もう一人の方が、



『いや、そんな事はない。楠公のやうな忠臣は、日本はおろか唐天竺にだつてゐない。水戸黄門様が、濠洲に忠臣の鑑として碑を建てたのは、何よりの證據ではないか』

と、やり返します。

『拙者の云つてゐるのは、人物のことだ。智慧や才盡のない者は、いくら志が立派でも大きな手柄は擧げられん。建武中興だつて、北條を滅したのは新田殿だ。赤坂、千早の小城に時々敵の大軍を惱ましたのは、正成の手柄だが、これが精いつばいで都へ上ると、もう影が薄くなつたではないか。濠洲の一戦に、すぐ討死と覺悟をきめたのも、思慮分別の浅い證據ではないか』

圓の中で聞いてゐた青年は、おれ／＼して奥歯をばり／＼と噛みました。

『それは違ふ。織公の討死は、朝廷の奸臣がその謀計を用ひなかつたためで、思慮分別をつくした末だ』

相手もなか／＼負けてゐない。

『拙者はさうは思はん。孔明は玄德の三顧に

よつて、はじめに出鷹を肯したが、正成は詔をうけると、直ぐ都へ馳せ上つた。この軽々しい振舞が、最後まで自分を軽くしたので、折角の謀計も、朝議に重きをなさなかつたのだ』

こゝまで我慢に我慢を重ねて聞いてゐた副の青年、もう堪らなくなつたと見えて、いきなり戸を蹴つて廊を出ると、その座敷に躍りこんで來ました。

怒つた青年

この突然の事に驚いたのは若侍だが、それよりも火玉のやうに怒つた青年、

『桶公と諸葛孔明とを何うのかうのと云つたのは誰だ』

『無斷で我々の座敷へ跳び込んで來て、何うしたんだ』

『何うもせん。先刻から彼方で聞いてゐると、正成の悪口を云つたのは誰だ』

『悪口を云つたのではない。たゞ議論をしてゐただけだ』

『貴公だな。そんな事を云ふのは屁理窟といふものだ。貴公の云つてゐる事は室鳩巢の楠、正成諸士教の受實と見るが何うだ當つたらう』

無名の青年に圖星をさゝれて、若侍はぐつと詰りました。青年は、威丈高になつて、『室鳩巢が何だ。すでに上州の高山伸縄先生から腐儒何をか識らんと喝破された大馬鹿者ではないか、諸葛亮が自ら重んじたため、關羽、張飛の上に立ち、桶公が軽々しく出たため尊氏、義貞の下におかれた、これをもつてその才を比べものにならんなどとは、自ら售らんとする卑しい心を露骨に表はしたものだ。貴公たちは書物を讀んで、そんな議論をするくらゐなら、元弘の時と三國の代と、年を同じくして論ずることは出来ない位のことには御存知だらう。漢の季は天下が麻の如くに亂れて英雄四方に競ひ立つた、その頃、劉備玄德は、履を賣り藎を織り、見る影もない一賤夫であつた。こんな者の招きには、百顧二顧を重ねても、決して遅くはない。孔明が

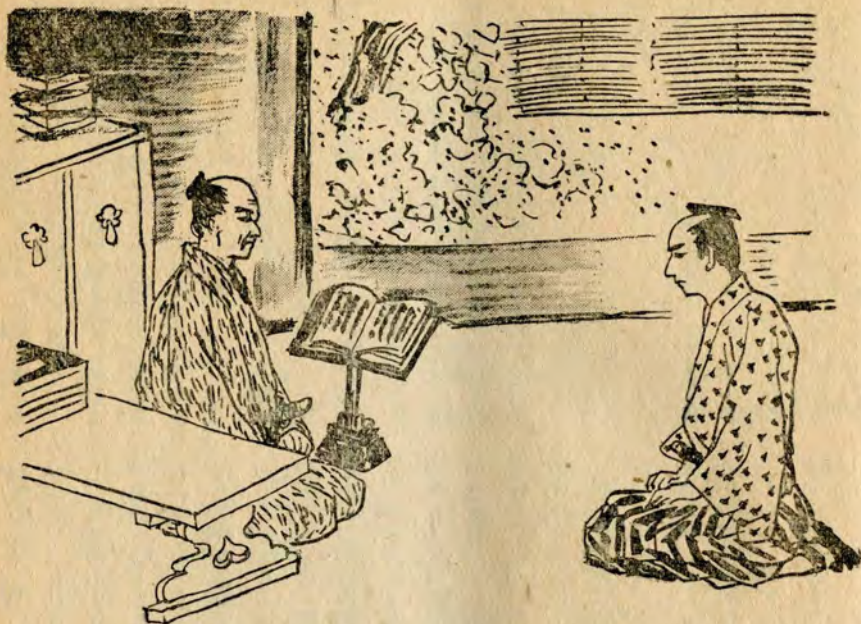
三顧によつて出たのは、むしろ早いくらゐものだ。しかるに桶公の場合は大變な違ひである。赫々たる天朝は神の在しますところ、開闢以來連綿として、萬世一系の御位を、天地と無窮に傳へ給ふ、普天の下卒士の濱、何れか君の民でないものがあらうか、中にも桶公は廷臣の裔、殊に長く畿内に住む者、至尊の難に遭はせ給ふを、安閑と他處に見過されやうか、召命を待つて立つたのさへ、むしろ遅い位に思ふ、これをもつて孔明の出處と、同日に論ずることが出来るか、返答を承りたい』

と、蓬頭垢面の青年が火を吹くやうな熱辯に、若侍は心からうたれました。

『いや、まつたく室鳩巢の受實りでござつた。拙者の淺學何卒おゆるし下さい』

そこは物の分つた侍と見えて、手をついて頭を下げました。そして、

『拙者は、小澤蘆庵先生の教へを受けたく上洛しました羽州の浪人龜田文五郎と申す者、御尊名を承りたい』



『いや、名を名乗る程の者ではございませぬ。仔細がございまして姓名の程は御容赦願ひたい。小澤先生に教を受けましたか』

『それが、今日で六日、毎日先生の宅を訪ねますが、とんと逢つて下さいません』

『ほう、先生は來客と逢ひませんか』

『人の話では、何うしても逢つて下さらないとの事。明朝、斷念して歸國するつもりでをります』

若侍の聲は、急に萎いでしまひまし

た。

もう一人の若侍が、この時、突然、

『いや、妙な臭氣がする。いつたい何うしたんだ』

と、騒ぎだしました。

さう云はれて見ると、なる程、剛のやうな臭氣が鼻を刺します。無名の青年は、平然として、

『貴公たちが、屁理窟ばかり並べてゐたので、座敷中に籠つたのでせう。は、は……』

肩をゆすつて笑ひました。すると、龜田文五郎、眼を丸くして、無名の青年に、

『貴公、大變な物を持出してゐる。その團扇は、どこにあつた』

『あゝ、この團扇か』

と、云ひ乍ら青年は驚いて放り出した。うす暗い間に蚊が多かつたので、團扇で蚊を拂つてゐましたが、議論を聞いて夢中で、剛の團扇を持つたまゝで飛び出して來たのでした

翌日、小澤蘆庵先生の玄關へ、例の青年が現はれました。そして、臆する色もなく、

『琴の修行のため、この度江戸から先生の御高名を慕つて参りました。福田伊三郎と申す未熟者でございます。何卒宜しくお取次をお願ひ申します』

見すほらしい青年の風體を、じろく眺めてゐました取次は、しぶく點頭いて、一旦奥へ行きましたが、すぐ引返して來て、

『どんな御用か知れませんが、先生はお年を召して、近頃は人とお逢ひになりません。また琴の修行なら、他に立派な師匠が澤山ござりますから、お目にかゝるまでもない和仰しやいます』

さう云つて、取次が引込まうとするのを、青年は、

『暫くお待ち下さい。實は、手前は野州宇都宮の儒學生で、江戸で遊學をしてをりました。が、この度都へ上りましたのに、はじめての土地、知人としてございません。かねて先生の國學に御精通なされ、その凡俗ならざる御

氣質をよく承つてをりますので、遙々お慕ひ申して、これまでお訪ね申しました。しかし、お目にかゝる術もございませんので、琴の修業と申しましたのは、長者にたいして偽りを申したやうでございますが、全くやむを得ぬ事情があつて、心にもない偽りを申したので、何卒この儀おゆるしあつて、暫しの御對面下さらば、肝膽を吐き、志願を告げて、

ぜひとも先生の教へを乞ひ、またそのお力を、拜借いたしたい事がございます。その上なはお心に叶ひませぬ節は、どのやうなお叱りを受け、たとへ叩き出されましても苦しうござりません。折入つてのお願い、今一度お取次下されまいか』

熱心な青年に、取次の心は動かされました。一日に幾十度となく玄關拂ひを喰はしてゐる取次だが、この青年の言葉には、ぐい／＼と引つける強い氣魄を感じたのです。

しかし、先生は決して逢はうとは仰しやるまいと思ひ乍ら、もう一度奥へ引込んで見ました。

すると、此方で何にも云はないうちに、

『變つた若者ぢやのう。志願といふのは何ういふ事か知らぬが、逢はずに歸して心残りがあつてはならん。此方へと申せ』

先生は、もう聞いてゐたのです。

『それでは案内いたします』

『うむ、聲音といひ、言語といひ、なか／＼な青年ぢや』

さう云つて、先生は、自分の方から廣間の方へ出て行きました。そして、先生は、

『志願を訊かう』

と、膝を進めました。眼光の鋭さ、舉動の立派さに蘆庵は、逢つてよかつたと思ひました。

『先生にたいしまして、このやうな事を申し上げるのは失禮でございますが、歎かはいひのは、今の世の有様でございます。申すも畏き事でございますが、歴朝御代々の山陵は、萬世の後にいたるまで、天下四民のこと／＼くが、仰ぎ敬ふべき處でございます。それなのに、今その尊い山陵が、何うなつてをりませ

うか、中には疾に隠れて、御趾さへも知れぬのがおはしますと承ります。忠義と申しますのも上御一人に對してのこと、その御先朝の山陵を蔑ろにいたして、日本臣民たる者の道が立ちませうか、見る影もない手前のやうな者でも、一たび思をこゝに致しますと熱湯の涙があふれ、息もつまるのでござい

す。旅寢を重ねてはるゝと、御閑居を驚かしましたのも、長年京にお住まひなされ、また古の學問に御精通ある先生の御助力を得て、埋めました山陵を尋ね出し、實地を拜

して在のまゝを、公儀へも告げ世にも傳へて誠の忠義を獎めたいとの微衷にほかなりません

青年の眼からは慷慨の涙が、頬を傳つて流れ落ちました。

『いや、感じ入つた』

さう云つて蘆庵は襟をたゞし、

『長命をすると嬉しい事を聞くものぢや。まだお年は若い、此方こそ世にも得難いまことの學者ぢや。穢ろしい草庵ぢやが、心置なく逗留して、御陵を訪ねなさるがよい。及ば

ずながら役に立つことがあつたら、いつでもお力そへを申さう』

『忝ないお言葉、有難う存じます。何分共宜しくお願ひ申しまする』

この青年こそ誰あらう、高山彦九郎、林子平と共に幕末三奇人といはれた藩生君平です。小澤蘆庵を訪ねたのも、皇室の式徴を敷いて、これが顯揚の一端にもと、心をこめた『山陵志』の資料を蒐めるためでした。

(鈴木金平畫)

陸海軍病院「慰問淨土」

寄附者芳名(略敬稱)

五 圓

一圓二十錢

二圓四十錢

一 圓

一圓五十錢

和歌山縣田邊町

兵庫縣水上郡相原町

奈良市三棟町

臺中市新富町一ノ六六

大阪市住吉區帝塚山中三ノ四三

元牟婁組寺院

中川 鈴

誕生寺

高津 ウメ

澤 良子

二圓七十錢

二 圓

一圓三十錢

一圓二十錢

三 圓

二十 圓

九十 錢

一圓二十錢

一圓二十錢

府下八丈島三根村 開善院

滋賀縣水口町新城 永福寺

廣島市堺町二丁目 山本イト

滋賀縣日野町村井 伊藤定眞

大阪市北堀江通一ノ二 若林與惣吉

大阪市東區豐後町 木村郁子

京橋區銀座西八ノ一 淺野竹次郎

神奈川縣大楠町佐島 山本徳英

福岡市西新井町六丁目 福田倉一

或る病兵の手紙

編輯部



「或る病兵の手紙」は酒井廣美氏から中村辨康師にあてた手紙です。酒井廣美氏は勇躍お召に應じて以來、大陸の各地に轉戦し、赫々たる武功を輝かしましたが、不幸病魔の侵すところとなり、遂に内地に送還され、今は〇〇陸軍病院に一意

療養に努めてゐる勇士です。

士です。

同氏の病状は一時全く絶望状態に陥り、ために醫師からは死の宣告を受けた位でした。そして死に

直面するや悶々の情やる方なく、轉々として獨り悩んでゐましたが、その時丁度本誌が「慰問淨土」として同病院に配られたのを手にして、初めて信仰の力強いことを知ると同時に、苦しい心情を打ち開けられる相手を見出したのでした。そこで同氏は一縷の望みを發見し、早速に信仰相談擔當者たる中村辨康師に手紙を以て苦惱の情をそのまゝに訴へましたら、中村師から折返し懇切な回答が得られました。

こうして酒井氏は中村師の導きによつて漸く信仰に生き得る人となり、今では明るく力強い闘病生活に毎日を送つてゐます。しかしかくなるまでには或ひは疑ひ、或ひは信じ、或ひは不満を感じる等幾多の曲折がありました。同氏の手紙を拜見すると、その悩みが深刻なだけに、その喜びも大きくまた赤裸々な心情を訴へてゐますので、得難い入信實話であります。中村師のお許しを得て同氏の手紙をそのまゝこゝに掲載いたします。(係)

第一 信

拜啓、突然で失禮の致はお許し下さいまし。實は私は肺結核で死の宣告を受け、いまはただ病床にあつてその日の来るのを待つてゐるものです。

丁度一ヶ月前のことでした。醫師が私の身體を丁寧に診た上でこう申されました。

「お前は重症だからハッキリ病症を聞かせてやらう。お前は兩肺ともに全部駄目なのだ。だからとても見込みがないのだよ」

私はこの醫師の宣告を聞いて何んなに驚いたか、御想像下さいまし。思へばここに入院してから既に八ヶ月になります。その間心の内では何時かは全快するであらうと、その日の一日も早く来ることを心に描いて療養に努めて来まし

た。そしてとかく挫けがちな自分の心を叱り／＼して今日まで来ました。それだけに私の身體がすでに駄目になつてゐると知つたとき私は瞬間目の前が眞暗闇になつてしまひました。

ひしと身に逼る死の恐怖！それから僅か数日の間に眼は血走り、頬はこけ、われながら浅間しいほどに顔が變り果てゝしまひました。



SHIRO

「さうだ、死ぬものは何うしても死ぬのだ。この上は神佛にすがつて心安らかに死にたいものだ」

これが私の一週間の苦悶の後にやつと思ひあたつた氣持でした。それから求道の讀書が始まりました。

一ヶ月たつた今日まで無茶な讀書によつて懸命に信仰を求めました。死の恐怖から逃れたいと、必死に道を求めました。しかし何うしても眞實の信仰が得られず、佛の慈悲がわからずに日夜苦悶が

續きました。小さな自我をつまらぬものとして早く捨て去り、絶對の佛に自己を捧げ盡せとのことだつたので、一心に稱名を唱へました。私の申す稱名は全く死に臨んでの念佛です。それからほんとに眞實でした。ほんとに眞劍でした。

だが、お念佛を申すその下から煩悩の影が邪魔をして、信じたい信じなくてはならぬと思ひ焦りながらも何うしても入信することが出来ません。

この世に生を享けて三十二年の間、決して短くはない年月なのに今となつては一睡の夢でした。まして、これから先きは幾數日の間を生きてゆけるのか判らぬにして、もそれこそほんとに一瞬の間に過ぎ去つてしまふことでせう。世は無常！生ある者は必ず死

す！

この言葉は確かに眞實だと思ひます。しかしこの死とは肉體の死であつて、そこに永久に死ぬことのない「何もの」かであるのではないでせうか。私はその「何もの」かをハツキリと知りたいのです。

「仕方がない」

とも諦めてみました。しかしこの諦める下から、次ぎ／＼と元氣よくすつかり癒りきつた身體をもつて再びお國につくため退院してゆく友の姿をみるにつけても、その友の姿と較べて、生きては退院出来ぬ自分が、たまらなく淋しく悲しくなるのでございます。

一方、病症はと云ふと悪くなつてゆくばかりです。咳は苦しい。痰はどん／＼出る。呼吸をするさへ困難になつて來ました。もう私

の身體も長いことはありますまい

私は今から六年前に長男を失ひました。その直後に商賣の方を失敗しました。多くの債權者には迷惑をかけ、九人もめた雇人はちりちりばら／＼になつてしまひ、縮小後の店も種々の事情で結局は投出してしまふことになりました。

そんな時にまた／＼長女が急病で逝き、自分は應召致しました。そして私は野戦にあつて、華と散ることも出来ないで、病氣のために後送され、こうして死の病床に身をだへてゐるのです。後に残る妻や子供は何うなることでせう。あれこれと考へればますます頭が混亂して來るばかりです。

この罪多い私が、この期に及んでも自力が捨て切れないで、信仰を得られないとは、何んと云ふ浅間しい業の深い事でござりませう

先生、何うしたらこの自力を捨て切つて、鐵のやうな力強い信仰を得ることが出来るでせうか。何うしたら一切の煩惱から解脱して清淨な氣持で死んでゆくことが出来るでせうか。

先生、どうぞお救ひ下さいませしかやうな相談を願ひしますのは誌上の信仰相談にお答へ願つても結構でござりますが、この頃は手足さへ冷えて來ましたので、先生の

お答えが得られるまで私の壽命が待つてくれるか何うかわかりませんが、御無理なお願ひではあります、出來ましたら直接お返事を下さいますなら有り難い仕合せでござります。先は取急ぎお願ひまで、

四月八日

敬具

〇〇陸軍病院第七室

酒井 廣美

中村辨康先生

第二 信

勝手なお願ひを突然いたしましたに拘らず御親切な御返事のお手紙を早速に下さり有難うござりました。御厚志の御本とともに再讀三讀いたしました。

これまで信心といふことに縁の薄かつた自分には、佛教といふものが何を教へるものなのか勿論よく判るはすがありませんでした。そしてただ／＼死に臨んであわを喰つてしまひ、目茶苦茶に本を讀み、その内容を知ることゝ夢中であつたので、その外には何も考へ得られなかつたのです。

お手紙によつて、佛教は理窟で知るものではなくして、信仰することだと云ふことが判つたやうに思ひました。

先生の仰しやる通り、私は實は死にたくなかつたのです。何んでも彼でも生きてを

て来たやうな気がいたします。おさとしの如く一生懸命に信仰

SHIRO



りたかつたのです。そして醫師の宣告によつて生きてゐる事が望めぬ事を

知つてから、信仰

と云ふもので死への

驚怖神經を麻痺

させたといふ願つて

ゐたのでした。

そして先づ一心

になつて本を讀み

ましたが本に夢中

になればなる程、よけいわからな

くなつて、遂に先生を煩はした次

第だつたのです。しかし先生のお

手紙によつて、自分では氣のつか

なかつた點がはつきりして来たや

うに思はれ、何んとなく落ちつい

さまにしつかり抱かれてゆくつも

りです。

この頃になつて大自然の理が少

しづつわかるやうな気がいたしま

す。頭を回らして窓をみると、院

庭に櫻の花が散つてゐます。無心

に散つてゆくこの花葩の一つ一つ

が、私の友として見えることさへ

あります。

今までは淋しさの餘り、話友達

が欲しかつたのに、この頃では本

を讀むために、又は如來さまを思

ひ浮べるために、更に又お念佛を

唱へるために、孤獨をさへ樂しむ

やうになりました。普段は餘り氣

にも止められなかつた病室のラヂ

オや著音機の音さへ耳につくやう

になりました。

ほんとに有り難いことです。

この分で行けば、いよゝゝの際

に餘りジタバタ騒がなくなると死ね

るやうに思ひます。

先日も軍醫殿が來られた節に、

「お前は割合に體力があるから死

ぬのに骨が折れる」と申されまし

たが、以前の私であつたなら、こ

の言葉を聞いただけで恐らくゾツ

として更に苦しんだことでせうが

今の私はもう驚きません。

私は三十二才の今日まで不信心

で過して來ました。この三十餘年

間の不信仰生活を考へても、死ぬ

までにはこの信仰を仕終らねばな

りません。ですから毎日が少し位

は苦しくても仕方ありません。本

さへ讀めれば一日も永らへたいと

思ひます。この延びた一日一日を

讀書と如來さまへの信仰とに捧げ

るつもりです。

如來さまの御教でこうして先生

のお教へを受け得られたことは大

變嬉しく思ひます。

もう何んなことがありましても

ジタバタせぬつもりです。凡てはおぼしめしですから、人間の力ではなんとも出来ません。なんとも出来ぬ小さな自分であることがわかつて来ました。

先生どうぞ今後ともよろしくお願ひいたします。

先づは御禮まで、左様なら

また息のある内に何かと御教示願ひたいと思ひます。御好意に甘へて、またわからぬ所を買ねさせていたゞきます。

四月十日

酒井 廣美

中村辨庭先生

第三信

先生、大變御無さいたしました。實は發熱のため手紙を認め難かつたのです。

過日、熊澤軍醫殿が「中村上人からの依頼でやつて来た」とわざ

わざとお尋ね下さいました。本當に有難う御座りました。感きはまつて泣いてしまひました。

度々御親切なお手紙を下され深謝してゐます。ところが白狀し

すと、先生のお導きによつてすぐにでも信仰に入れさうなわけ

のに、實は日が過ぎるとともに最初憶へた熱が段々にさめて来る事に気がつきました。これはいか

ん。死は近づいてゐるのだといくら思つてみても、何うも眞劍にな

れないので困つてしまひます。その後私が一生懸命に信仰して

ゐるだらうと思つて下さる先生に對して、まことに申譯ありません

が、先生、とても駄目です。とき／＼呼吸困難になる自分

は、お念佛の聲に出不いことがあります。こんな時には止むなく右

の指さきで、トントんと調子を取り、そして眼をつむつて心に南無

阿彌陀佛 南無阿彌陀佛と念じ續

けるのですが、それでも気が散つて仕方がありません。何んとかしてとあせればあせる程困難になつて、ほんとに駄目です。

病室が可成りさわがしいためにつひその方に気が散つてしまひ

す。指の先ではトントノと調子をとつてたいてゐますが、頭

の中は外の事で一ぱいです。先生、死生を達觀する心況は、

信仰に依つて得られるものでせうか。今まで随分本をあさりましたが、

その多くは道德の向上が宗教信念であり、地位も名譽金錢の如きも

鼻糞程にも思ひません。ですからこんな本は何冊讀んでも駄目です

今後二ヶ月か三ヶ月か或は半年生きたか、此の長い一日々々を何を

樂しみに生きたらよいでせうか。本日兵役免除の通知を受けまし

た。近日中に軍事保護院の療養所へ轉送されます。

自宅ならば靜かに信仰生活が出

來やうかとも思ひますが、看護人が妻では小さい子供達に必ず傳染すると看護婦長が申します。

しかし療養所では大勢ですから心靜かに、念佛にいそしむことが困難でせう。書くことが無茶苦茶

になつて來ましたが、何か信仰をあほる本はないでせうか。あとからど／＼押し上げて呉れるやう

な本を教へて下さい。そして死に臨んでも尚ほまご／＼して居るこの頭をなぐりつけるやうな方法をお教へ下さい。

追申 昨夜夢中で書きましたが今朝見て亂暴な書きぶりに驚きました。然し書き直すだけの根氣が

ありません。因へて居る今は考へては書きません。ただ思つたままを書きました。何分よろしくお願ひいたします。

四月三十日

中村上人様

酒井廣美

(つゞく) 大羽四郎畫

俳壇

太田馬車子



深川區江町 清水瀧治郎

雨の日のよき友を得て蝸牛

蝸牛が二つ並んで、にじりあるいておる様子が如何にも楽しそうに見えたのであらう

「よき友を得て」に雨の日は似てもつかない明い感じを與へてのが良い

北海道 中村 もん

薬賣り覺寢の人を起しけり

評 前山の薬賣りであらうか、それとも夏座敷の様子が刷はれて面白い

大阪市住吉區 森 正義

山蟻の脚傳ひ來て晝近し

評 晝近しといふ感じの鋭いのをとる

滋賀縣 美船美佐緒

雨に濡れし睡蓮雨に濡れて見え

順調に降りてめでたく梅雨に入る

京都市 永田 七郎

玉蟲はクキン兜蟲はキンダかも

北海道 花田 順往

朝な朝な山鶯の聲に醒む

香川県 日向 法圓

電線のかげ二筋や夏の月

滋賀縣 美船橋笛子

茶の席や狭しともなく花涼し

青森縣 佐々木 孤月

恐山静けき夜半の佛法僧

島根縣 林 良 碩

朝風やダリヤの花と戯れて

福島縣 古川 喜作

天地の恵みゆたけき夏祭り

栃木縣 萬壽 云海

琴の音の流るるに揺れ豆の蔓

島根縣 石見 千翠

畑を打つ和尚の手足豆だらけ

三重縣 大野 歩行

託兒所を見舞ふひまある田植かな

此のなげき誰にか告げん閑古鳥

同 鈴木 白舟
鳩の胸毛彩に吹かれて遅日かな

岩國市 長岡 白朝
鯉の尾が引かより窓にあり

北多摩郡 船津 思露生
みとりめの脈との影の暖かし

新潟縣 西巻 伯東
梅雨の街灰色にして霧つぶら

奈良縣 寺田 定信
薫風の柱短冊掛けもして

高知縣 横山 亮圓
立ち並らぶ義士の石碑や苔の花

青森縣 丸尾 傳山
隣組よりあつまりて田植かな

京都市 齋藤 耕善
何がために今年も蟬のかく鳴く

近江 美船橋笛子
次々に蝶訪るゝ牡丹かな

神奈川縣 河上 隆吉
散步禁止の標札古りし青葉かな

東京市第二病院 荻野 兎月峯
麗かさ病床の窓明け放つ

大阪 田中 秋芳
微風に木蓮の花にはひくる

鳥根縣 神一 倫道
鯉のぼり指さしながら母と子と

東京市 渡邊 一介
金魚屋の聲の流れて若葉窓

茨城縣 眞木 謙太郎
暖き入るゝ水光るなり青嵐

東京市川 五島 賢城
花桐の碧に晝の雨つゞく

横濱市 田中 玉泉
螢追ふ兒に闇こゆき丸木橋

東京市 鈴木 白舟
青葉吹くこの町の此處住みよくて

東京市 船津 定祐
水叩く水鶏の聲の夏めきぬ

青森縣 丸尾 傳山
静かなればはてなく青し夏の海

青森市 高松 英紀子
計報さく梅雨このごろの風つよく

小樽市 平井 正念
夏草へ馬放たれていい天氣

山梨縣 原 一幸
七夕の露を覗の海の水

同 杉本 梓子
川舟の釣りの晝寢となりけり

投稿規定

官製はがき一回二句以内
とし「淨土」編輯部併置
係あてに送ること

トコ車漫



漫車協団

ねえやのは純綿じゅんめんでした (山崎 善一)

母「あなた大變だいへんですり、あの水着みずぎを御覽ごらんなさいよ。ねえやがあの娘この水着みずぎをきて、あの娘こがねえやの水着みずぎをきてるんですヨ」



田園交響樂 (川口 久)

彼は休暇で歸省ききせうするのに學生一同がくせいどうどうで作つたホーレン草ほーれんそうを土産みやげに持つて歸つた(略)

彼はそのまゝ學校には戻つて來なかつた。後日、彼から見事な野菜が送られて來た。彼は見込まれて今は田舎で立派な百姓になつてゐるとのことだつた。



偉な鐵蠅

豚小屋へ飛び込んだ蚊
「ウハツすごい蚊いぶしがゴロ／＼してゐるワ、アー驚いた、」

(をき 原賢次)





夕立奇談

(川口久)

突如、豪雨雷鳴の夕立あり、彼の浴衣はスフの新調なれば、スツボリ脱いでフトコロに入れ、やうやくその場を逃れた。はてフトコロ、變だね、と問ふ勿れ。

何分盛夏のことなりせば。

貸間窮す

(をき原賢次)

或る學生「夏向き貸間あり」の貼紙に勇躍案内を乞ふたら、何んと防空壕ではないか。管理人の説明に曰く「いかゞ涼しくて夏向きでござんしよ」



作職

(山崎善二)

「マア、螢の光、鈴蟲の音、まるで田舎へ行つたやうだわ」
「ダカラ今年には田舎に行かず、ここで我慢しようね……」





東海道島田の記とうかいだうしまだ (下)

子母澤 寛

一、夜泣石よなきいし

むかし輦臺れんたいで渡つた大井川おほいも今は立派な橋がかゝつて、前日の雨で水かさの増した川づらを見ながら金谷の宿へ入つて行つた。一口に島田金谷とはいふけれども、昔は旅人は餘り此處へは泊まらなかつた。日坂から峠をこえて来て大ていは菊川へ泊つたものだから、金谷は餘りお金の落ちなかつた土地でありまして、島田の古老渡邊翁が、だから島田金谷と一緒にして市制を敷こうといふのがなか／＼うまく行かないのでといふ。

しかし日坂峠へかゝつて振返つて見下ろした金谷から大井川へかけての眺めは實に何んとも云へなく美しい。川べりの松並木が全く繪にかい

たようである。これアいいですね、鈴木氏がそういふと、渡邊翁はまア日本一の景色ですよと自慢した。峠は小夜の中山へつゞき、牧野が原へつゞく。中山の夜泣石は道から爪先立ちの細道をくねくねと登つたところにあつた。むかしはこの石のところが街道であつたのだらう。丸々と角のない大きく一抱え程の石がある。傍らに、何にか小さな紫色の花が一輪咲いてゐた。鈴木氏にはや／＼しながら、この石が泣いたのかね。そうだらうさと關山翁もにや／＼した。その昔、ことをもう臨月といふ女が、兄夫婦の金策のために通つたのをこの石の傍らで強盗に殺された、その刀の切口から子が生れて泣き叫ぶ聲を、峠の遠い上にある觀音寺のお坊さんがききつけて子を救ひ、飴を拵へてはこれを育てたといふのである。ではその夜泣石といふのは石が泣いたのではないのか傍らで子供が泣いたといふだけの事なのだねと、鈴木氏は皮肉な事をいひ出した。そうらしいねと關山翁。では別にこの石がどうといふ事がないぢやアないか、夜泣石などゝ話を餘り石にくつつけ過ぎてゐて面白くないね、それに第一その子だつて別にお坊さんに育てゝ貰は

なくても、その子の父親といふ男はどうして終つたのさ、兄夫婦の金策といふが、それはどうしたのだよ。どうも理窟に合はない物語だねと、鈴木氏は多くの世の傳説の如何なるものであるかを知つてゐながら、そんな事をいつて、腹をゆすぶつて笑つた。夫人はにこ／＼して、そのやうな事をおつしやるものではござりませぬ、このお話は、み佛の大慈悲といふ事をわかりやすくお教へ下さるお話で、その石やら兄夫婦の事などにこだわつてはお話の本當の味はわからぬのでござりませう、慈悲のお教へと共に、女の一人旅をいましめ、また悪人の最後の様など因果應報の道を説かれてあるのでござりませうといふ。

一、ほ、白

如何にも夫人のいふ通りである。私は、ずつと昔は、この石が子に代つて泣いたとして山上の寺のお坊さんと呼んだといふのではなかつたかとも思つた。石にさへ物を哀れむ心はある、その眞心が人を呼び助けを求めた。石でさへこうだぞ、まして人間に於てをやといふのであら

う。それを、後々、石が泣く筈はないとか何んとか、なまじ傳説の眞意を解せず、石の傍で殺されたといふ事にして終つたような氣がしてならない。夫人のいふ通り、これは慈悲の物語ときいて、むしろ心ない石に合掌すべきであるかも知れない。

石の傍に立つてゐると、少し坂道の下の方でいゝ頬白が鳴いてゐる。鈴をふつた野育ちの鳥としては滅多にきけない美しいものであつた。私は、その聲を追ふようにして坂を少し下へ下つて行つた。頬白がたゞ一羽だけである。晴れた初夏の野が坂の下に開けて、次第にそちらへ行くらしい鳥の聲がまことにしみじみとした。野の鳥は野、山の鳥は山できくのが一番である。頬白は伊勢がいゝとしてゐる。毎年、東京の小島屋が伊勢へ行つてはその鳥を買つて来て今では東京にも名鳥が多くなつてゐるけれども、やつぱり、野で本當にしみじみと鳴いてゐる鳥にはかなはないような氣がする。

三、牧野原

峠につゞいて牧野原である。ことしは遅く霜があつた

ので、茶がすっかりそのためにやられて終ひましてなと關山翁は、この廣袤三千町歩の牧野原の茶園のあちこちを指さすのである。葉先きが眞つ紅に朽ちてゐるし、葉の生長の具合も何んとなく縮んでゐるのが、はじめて茶の木を見たわたしにもよくわかつた。この爲めにお茶が不足した、そこへつけ込んでひどく買煽つたものがあつた。忽ち協定相場も何にも打ちこわれて、値はぐんぐん上つて終ふ。市場の立會が停止となつて、經濟警察が動き出した。今度はあべこべにぐんと下つた。そこをぐつと一度に買付けたものがある。段々調べて見ると、これが猶太人系の商人でしてなと、ゆうべも島田の人達が如何にも忌々しそうに話してゐたが、一體、猶太人などいふものは、どんなところ迄手を延ばしてゐるものか、茶と猶太などとは凡そ縁のないものと思つてゐたが世の中といふものはさて／＼油斷も隙もならないものである。それについても、この牧野原は、實に東西二里、南北七里の高臺で、昔は布引原と云ひ御維新までは、たゞの野ツ原であつた。そこへ明治二年の夏、舊幕臣二百二十五戸が移住して御徒頭中條金之助が開墾頭となつて茶の

栽培をはじめたのである。中條は幕臣中一二を爭ふ劍客であつたが、この開墾には全く壽命を縮めた事であらう。茶が出来て商人が買付に來る。相場はこれ／＼でございませうが、殿様方のは別しておよろしうございませうから、奮發をいたしましてこれこれでお下渡しを願はしう存じます。あ、さうか、よろしいといふので品物を渡す。ところがその目方をかける時が問題である。頭の中條は元より千三百石の天下の直參である。秤の目もりを見てゐるのなどは卑しいと思ひ込んでゐるので、その秤の時になると、つと、横を向くのである。その間に、へえ、何貫目でございます。あゝさうか。こんな事で働らいても働らいても駄目であつた。紋付を着たり、劍術の胴をつけて茶の栽培をしてゐた人達は實に涙なしには聞けない數多くの悲劇を残して、多くは此處を離れ、たゞ少數だけが最後まで頑張つて、今日二百萬貫の茶を產出する礎となつたのである。

四、中條翁

中條金之助は、死ぬまでちよん髷をゆつてゐた。そし

て時々、島田の宿へやつて來る。關山翁の同志酒井氏は、子供の頃劍術が好きで、よく川原近くで、大勢の子供達を集めては打合をやつてゐた。中條翁は、袴をつけ酒德利を下げ、よくそこへ通り合せては、ちつとして眞面目にこれを見物してゐた。元より子供の劍術である、劍法にも何にも叶つてはゐないのだらうが、翁は、これさへもゆるがせにせず、見終ると、丁寧に頭を下げて、歸つて行つた事を、酒井氏は未だに記憶してゐるといふのである。この中條翁以下の開墾隊の人々の一人一人について、充分小説たるべき物語はあるべき筈であるが惜しむらくは、餘り多くが傳へられてゐない。

縣の試験場へよつて、若い技師さんからいろ／＼な茶の話をつかゞつて再び道を島田へ引返した。それと知つてゐながら行きには氣がつかかなかつた承久の亂の忠臣中納言宗行卿が小山朝政に伴はれて菊川の宿へ來た時、鎌倉の下知によつて殺されたその墓を知らせる石柱を戻り道でふと氣がついた。私は立停つて、合掌を久しくした去年の秋、甲州黒駒への道すがら、山中湖畔の紅葉を見るためざと廻道をして行つた事がある。車が紅葉の

縮坂峠を通つた。その道わきに、同じ亂に敗れて、この峠の傾斜面のところで斬られた宗行卿の同志藤原光親卿のその現場に建てられた墓を見て餘りの淋しさに思はず泣いたことがあつたが、宗行卿のは、墓を眼の當りにしなかつただけに、私の不思議な泣顔を、口の悪い鈴木夫妻や、關山老に見せなかつたのがまだしもの幸福であつた。島田を突ぬけて藤枝岡部、宇津谷峠を越えた。鈴木夫人は、文彌殺しはどの邊だつたのでござりませう、これに應じて關山老は、この邊でござんすといふ。どうも頗るいかゞはしい答辯である。ね、どの邊でござりませうか、夫人はまた私へきいた。私も知らない。一體どの邊だらうか。

鞍子の宿へ入ると、すつと横道を川に沿つて上つて行つた。鈴木氏の主張によつて、とろゝ汁を喰ふためである。が、今は餘りうまくない、うまくないと云ふよりはまづいといふ方である。

その直ぐ近くの吐月峰は天柱山柴屋寺といふお寺である。古い佗のある貧しげないお寺である。はじめ京の嵯峨から竹を移植した。そして代々坊さんがこの竹細工

を賣つて口を養つて來たのである。吐月峰と書いて、はいふきと云ふ。吐月峰はいはいふきではなく寺の別名である。しかし、竹林が寺を包んで青々としてゐる。今、寺で賣る竹細工は果して坊さんの手作りであり、またあすこの竹であるかどうかは知らない。が、この寺の庭もよく、その竹藪も殊にいい。坊さんであらう小さな老人が腰を丸くして、この寺の寶物を説明してくれる。そして最後に、さア／＼サツと傍へよつて、よく御覽なさいと。この邊りからまた雨になつて來た。そしてその雨の中を私達は靜岡へついた。さア靜岡ですと奥さん病院へつけませうか。私がそういふと夫人は、笑ひ乍ら、ほんとうによろしうございました。あたくしは、所詮先生はここまでは持ちますまい、靜岡へついたらすぐにお宅へお知らせする手配をしなくてはなるまいかと、そればかりを心配いたして參りました。ほんとうにようございましたといつた。この日の行程ざつと十里。しかも今も私の耳にはあの中山の頬白の鳴音が耳に残り、夜泣石近くに賣る大黒屋の飴のうまさ忘れられずにある。



鳥山町 大 輪 清

世の中はみんな嬉しきことばかり
人生に敵して、あるサトリから此の言葉が出たとしたら、この句はすばらしい、で無いとこの句は平凡に墮する、だが、作者は百に近き苦吟をものして居る、いゝと手を盡して居る。何が足り無い、かが不足、商人が威張りちらす、テナ不満を顕べてゐたら、廿四時間のべつ言つて居ても言ひ足り無い、その時、この大變の文字、實に尊に限りである。

大寺、山茶花落つる寺など、寺には随分いゝ情景が多い、私もカナリ詠んだ、寺は何をよんでも句になる、茶殿、寺、森閑、よく調和して居てくれる。作者は江景色に調和される。

福島縣 古川 喜作

歸還して國債を買ふ日のありき
日もありきまで言はぬ方がよいのでは無いかとも思ふ、ものはあまり言ひ盡してしまふと餘韻が替くなり、却つて損をする事がある。

福島縣 古川 喜作

この風が戦地へ吹いて貰ひたい
何のこだわりも無く、スラリと言つたところが結構、雨につけ風にわけ戦地を思ふ日本人あつての日本國である。替きかな。

栃木 大 輪 云海

友だちの生活始ます雞を飼ふ
この語法、これがチヨクラチヨイと出来ると思つたら、それこそ大變、川柳はあまり進みすぎていけず、そうかと言つて後れて居ては倘いけず、だから六ヶしい。

福島縣 瀨谷 靜山

小梅市 平井 善慈

何處へ行く船にも岬晴れてやる
句が大いゝ、同情に富んで居る、朗然たるものである。晴れてやるがよい、心は斯く廣く持たれ。

福島縣 瀨谷 靜山

朝 鮮 武 内 竹 美

茶殿干す寺、森閑と猫眠る
布施殿を張る障子の寺、茶殿干す静かな

妻の怒り黙つて聽ける幸福さ

深川 細田 初枝
蚊帳吊つてはしゃいだ頃をなつかしみ
三重縣 大野 歩行

死んだ父歸らぬ事をまた思ふ
名古屋 冬 夏山人

一切經よんで探した親ひとり
鳥山町 おほわらんかい

夜半の風天から何か傳へてる
神奈川縣 河上 陸吉

久々に黒潮戀ひて傷兵は付ち
香川縣 日向 法圓

このまれし西瓜もまたず師は近きぬ
大阪府 島本 八重

大蒲團仕立てて汗のやれ嬉し
南行徳 境 盧 靜

女房の慣れぬかまどに拜むやう
栃木 萬壽 云海

怪物は苦勞を思ふ心なり
北海道 花田 順往

牛飼の笛遠くなる野邊の寺
小梅市 平井 正念

かくれんぼ顔だけ隠しもういいよ
京都府 若木 利造

ブル今水の面せまく子等むるる
北會津 古川 喜作

生活のかてなれば赤き櫻桃を賣る
朝 鮮 武 内 定賢

雨霽れて書院清々しく茶をすする

鳥山 大輪 清よし
念佛が笑つて死ねと言つて居る
香川縣 日向 法圓

只今の聲うける人なし今日もまた
ふか川 細田 初枝

うたたねにやさしい親の慈恵を知り
岡崎市 佐藤 信子

めつきりと年を召された父の皺
栃木 大輪 云海

母の夢記憶辿つて涙する
山梨縣 原 一幸

まだねむい子の眼に一つこぼれ梅
東山中學 駒澤市 郎

水すまし次から次と池せまし
小梅市 平井 正念

せますぎる世界へ終に眼が覺めた
大和 桂 牛 助

羊羹をいつまでも嘗め母無き子
鳥山町 萬壽 云海

鹽で食ふ飯の美味さも土の足
東京府 野崎 尚秀

左利き右の爪から先に剪り
宮崎縣 小 牧 衛

臨月の猫の崩れるやうに寝て

投稿規定

はがきに一回句數に制限なし「淨土」編輯部柳壇係あてに送ること。



仔猫と女學生

内 山 憲 尙

た。やつと眼が開いたばかりかも知れませ
ん。雨に濡れて白い毛はよれよれになつてあ
ます。誰かが捨てた猫でせう。

仔猫は柳の根元から家の軒の方へ渡らうと
してゐるのです。ところが、可哀さうにお腹

が空いてゐるのでせう、二足三足よちよちと
歩くと、自分の身體を支へることが出来ずこ
ろりと倒れ、又起き直つてよちよちと歩くと

ころりと倒れるのです。それが小さいだけに
餘計に氣の毒で、見てゐることさへ出来ない
位です。

×

私の行く方と反對の方から、女學校の二年
生か三年生かと思はれる、おカツバの女學生

が三人歸つて來ました。三人は私と同じ距離に
於て反對の方から、この仔猫の様子を見乍ら
歩いて來たのです。恰度仔猫の前で、仔猫を
挟んで、私と三人の女學生が一樣になり、四
つの視線は申し合せた様にこの可哀さうな小

さな動物の上に落ちました。
その時です。中央にゐた一番背の高い服を
着た女學生が、

「アー恐い！」

と叫びました。これが四人の者が仔猫に對
して出した最初の言葉でした。

私は思ひ掛けないこの言葉に、一寸びつく
りいたしました。

×

梅雨に入つてから間もない日の午後でした
私は芝公園まで行く用事がありましたので、
省線の田町で下車して、芝公園の方へ歩を早
めてみました。

小糠の様な雨が、葉の伸び切つた、街路樹
の柳に浸み込む様に降り注いでゐます。

電車通りの歩道です。

柳の根元に一匹の小さい仔猫が、動いてあ
ます——生れて間もない位の可愛い猫でし

私は『可哀さうに、氣の毒に……』と云ふ
 感じで一ぱいになつてゐましたから、女學生

からその様な意味の同情的な言葉が出るもの
 と初めから決めてゐたからです。



『恐い……』と
 云ふ感じがこの
 仔猫の有様のど
 こに潜んでゐる
 でせう。どこか
 らそんな言葉が
 出るでせう、—
 女の子である
 から或は恐いと
 云ふ感じがある
 かもしれせん
 それにしても
 『恐い』と云ふ
 言葉の前に『可
 哀さうに』と云
 ふ言葉が出なけ
 ればならない筈
 です。
 私は仔猫に對

する自分の同情を裏切られたので妙に一種の
 腹立ちさを伴ひました。

「あなた達は、この仔猫を見て『恐い!』と
 云ふ氣持ちの前に『可哀さうな』と考へませ
 んか、」

可成り眞剣な顔で三人に呼びかけました。
 左の方にゐた白い服を着た女學生が、思ひ
 出した様に、

飲めば益々

元氣旺盛

無(にんにく粉末)コナワサビ
 臭(固形にんにく)そてつ粉末

小供の疳蟲によく

さく孫太郎蟲あります

特約店大募集

静岡市上巻谷町

神谷昌孝

電話二八六三番
 振替東京一四六五二一番

「可哀さうね」と申しました。

仔猫は短かい歩道を、もう七八分横切つてみました。又ころびました。

時間を急ぐ私は、いつまでもこの様子を見てゐられませんが、それに、女學生の言葉で、一寸氣持ちが悪くなつてゐましたので、すたすた歩き始めました。

私は歩き乍ら最一度今の女學生の言葉を心の中で繰り返しました。「オー、恐い！」何と云ふ言葉だらう。

どう考へてもあの場合「恐い！」と云ふ言葉が先に出る譯はない筈です——教育の罪だ……『教育の罪だ』私は明らかにこう決めて仕舞つたのです。それ以外に斷定は出来なかつたからです。

×
學校教育の罪か、社會教育の罪か。教育から宗教を離して仕舞つたからです。

『大切なのは潤ひを作る教育だ。學校に家庭に、外國の物質文明が充満してゐて、人間としての、日本人としての潤ひがなくなつて仕舞つてゐるのだ……』何時の間にか私は芝園橋へ來てゐました。

庶務部よりお願い

◇皆さまの御協力によつて事務も追々整理が出来上りまして、面目を一新するに到りました。今後共何卒倍舊の御援助を御願ひします。

◇近頃入會者がとみに激増いたしておりますが、入會御申込に際しては小爲替同封でも振替郵便でもいづれでも結構ですが、必ず「新入會」「淨土何月號より送れ」と御明示願ひます。何の御記入も無く金額だけお送り下さいますと、事務取扱上餘計な手数を要しますので御注意願ひます。

◇尚振替郵便は普通の手紙よりは到着までの日数を要しますから、その點を御記憶願ひます。

芝公園の青葉が雨に洗はれて、靜かに雨の間に煙つてゐます。

歩道には細かい雨がしとしとと降り續けてゐました。

(野水昌子畫)

ひます。しかし安全と便利な點ではこれが一番です。用紙は毎號淨土卷末に貼付してあります。

◇退會御申越がその月の十日後になりますと事務の都合上翌月號の淨土が發送されますから、その分は料金御送附下さる様お願ひします。

◇本部宛お問合せの書狀には必ず通信料(端書または四錢切手)同封にて御願ひします。それでないと御返事致し兼ねる場合が御座います。且つ書籍のお注文には特別な規定のない限り送料を必ず御加算願ひます。凡て前納を立てまへといましております故、端書での御注文は特別の事情のない限りお斷り致します。



法然上人和歌註解

(七)

安 西 覺 承

池の水人の心に似たりけり

にぎりすむことさだめなければ

〔通釋〕 池の水はほんとに人の心に似てゐるよ——濁つたかと思へば澄み、澄んだと思へばまた濁り、その間さらにきまりがないのだから——。

〔感想〕 いかにもしんみりとした反省、それをのせた流れるやうな佳調、そのゆかしさに慕ひよらずにはをられないお歌である。人の心といへば、六窓一猿の譬だの、ころ／＼するから「ころ」だとか、幼時からよく聞かされた話である。まことに六窓の室にあつて狂奔する猿のやうに、私共の心は眼や耳やいはゆる

六根の感官を通じて浮動やむ時を知らぬものに違ひはない。煩惱具足、心は相繼ぐ妄念の溜に過ぎないともいへよう。かくて、磐石のやうな大安心は、私共にとつては、つひに及びもつかぬ天上の月でしかないであらうか。上人御自身さうおつしやつてをられるのである。私の心はおちつかぬと言つてをられるのである。このお歌の「人の心」の人からわれを除くことはできないのである。大體、われから遊離した人はない。この意味から續後拾遺集に

我が心池水にこそ似たりけれ濁り澄むこと定めなくしてとあるのはこれと全く同意といへる。上人はかう言つてをられるのである。

しかも、さう言つてをられる上人の全體が何とまた悠々と見えることであらう。何とおちついたお聲であり、變らぬお姿なので

あらう。

こゝなのだ。動がそのまゝに靜であり、否定がそつくり肯定になつてゐる、こゝなのだ。これがあるからゆかしいのだし、慕はしいのだ。私共がいつも求めてゐるものは、上人のうちにすべてある。み影にも、法語にも、お歌にも——このお歌にも、それがあるのだ。

まだ／＼私共はわかつてゐない。殊に心が、われ即ち人がわかつてゐない。もつと掘下げろ、素直になれ——このお歌からまたさう反省させられるのである。

〔参考〕 前述の如く續後拾遺集卷十九に源空上人作として、「我が心——」の形で出てゐる。

むまれてはまづ思ひいでんふるさとに

契りし友のふかさすことを

〔語意〕 ○むまれ りまれて淨土に生れることを云つてゐる。○ふるさと 淨土に對する意味で此の世をさしてゐる。

〔通釋〕 素懷を遂げて淨土に生れることができたならば、在世中ともどもにお淨土まありと固く約した友びとの深き信を思ひ

出し、先づ第一にこれを濟ひ迎へようよ。

〔感想〕 各留牛座乘華葉 待我閻浮同行人。といふやうな意のお歌である。お淨土まあり出來た人は必ずもとの國の迷へる人々を導き救はずにはゐない。だからお淨土まありは尊いのである。

このお歌では上人がことさら身近く感ぜられてならない。このお歌にこもるお情は、聖者のそれといふよりも寧ろ人間的な生々しさをもつて迫ってくる、私にはそんなふうに思はれてならないのである。何がさうさせてゐるのか。一應は歌の調子であるといへよう。しかし、歌調をさうさせたものはといふとちよつと難しい。凡情の推測は當を得ない恐れもあるが、次のお歌を見て、その邊の消息にも觸れてみることにしよう。

〔参考〕 新千載集卷九には末句を「深き心を」として出てゐる。

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて

淨土の莊嚴見るぞうれしき

〔語意〕 ○莊嚴 飾りておごそかなるさまをいふ。華池、寶

閣、水鳥、樹林、そこにましますもの、の佛、菩薩——美しくも厳かな極樂淨土の有様である。

〔通釋〕 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と口にみ名を稱へることをだけをつとめとして、かのみ佛のみ國の美しくも厳かな有様を見ることこそうれしき極みである。

〔感想〕

善導大師の觀念法門に、

若し口稱三昧を得れば心眼即ち開け彼の淨土の一切の莊嚴を見る

といふ詞がある。お歌はかゝる詞への隨喜の現れである。隨喜といつてそれは絶對的な信仰の姿である。そこで隨喜はやがて上人御自證の法悦でもあるわけである。

さて、前回より引續き以上五首は元久二年十二月の詠であつた。時に上人は七十三歳で、特に注意を要するのは、その望しきせる四圍の迫害のたゞ中にをられたといふ事實である。

前年の冬、叡山三塔の大家は大講堂に集まり、決議をして專修念佛停止の事を座主眞性に申請した。殊に今年十月には、南都興福寺の衆徒が新宗九箇條の失を擧げた訴狀を朝廷に奉つて、念佛の禁止と、上人及び門弟の處罰を要請したのである。

事情は急迫してゐた。上人はじめ門流の苦闘は察するに餘があ

る。この時である、以上五首の詠が親しく書き留められたのは。

右のやうな事情を考慮に入れて拜誦してゐると、これらのお歌のもつ意味がよほどはつきりして来るやうである。すなはち、逼迫する法難に答へてをられる上人のお姿をこれらのお歌のなかにをがむことができないであらうか。

千年ふる小松のもと、悠々無量壽佛のお迎へを待ちつゝ或は俗音のかまびすしさに拘らぬ巨松を仰ぎ、時に池水と動く心を凝視め、また苦闘の同行に思を寄せて、終に口稱三昧究竟の法悦を詠ふ。あゝ世間に答へる上人のお姿がいまざゞと大寫しになつてゐるではないか。

さても虔しくかつ力強い解答ではある。前歌でたまたま殊更なる身近さを覺えたのも、多分は成立の事情の鋭さから來たものと察せられる。ゆかしく、身近に、お歌に觸れてゆくことによつて教へをいたぐことが多いのは私共の幸福である。

淨き友 信仰坐談會案内

一、來ル八月廿四日 第二日 曜午後七時半

一、起信論講義 中村辨康先生

一、東京市本郷區東片町七八橋本樂榮方

電話小石川四九七六

御浴衣かけで御來聴下さい

淨き友の會幹事

信 仰 相 談

當 擔

中 村 辨 康

(迎 歡 問 質)

佛教は科學を何う見るか

(問)

佛教は現代科學の知識を如何なる眼で見るので

すか。出来るだけ委しく御教示下さい。

(徳島・小松島・片

山 靜 二)

(答)

御承知のやうに佛教は、西洋の科學が出来ない以前の教でありますから

佛教それ自身が科學を批判しては居りません

ので、特に現代科學を如何に批判するかと云

ふ御實ねは、少々御無理のやうにも考へられ

ますが、然し折角の御

質ねですから、少しばかり先づの指導に依る私見を申し上げて見ませう。

一切經の目錄を見ますと、今も私達が科學と云つて居るやうなものが相當にあるやうに

思ひます。従つて佛教は科學以上ではあるけれども、決して科學を無視して居るものではないことが推察されます。

元來科學は個々の事象物象を分析して或る程度の真相を把握しようとするものですから

事實段々發達して來て居るのであり、且つ今後も益々發達すべき筈ですが(例へば元素説が原子説に進展し更にラジウムの發見に依つて電子説に進展したやうに)其の性質上或る一定の地位(そのものの)を段々深く掘り

下げて居るのであつて、常に變化して居る實際に對しては暫く目を向けずに居る譯です

し、また事象物象が天地一切に關係して起り且つ天地一切に關係しつゝ常に刻々に變化振

動を續けて居る事實に對しても暫く目をつむり、唯だ暫の關係だけを研究して居るので

から、それは佛教に言ふところの「因果關係」だけをみるものであつて横の「縁起關係」を考慮して居ないやうに思ひます。之は誠に止

むを得ないことです。若し横の關係を採用して研究するとなると、到底限りある人智の及ぶところでなくなりますからです。だから止

むを得ないことですが、それだけに眞理に對しては一方的であるから完全したものとは言

はれません。法律などでもさうです。豎の關係だけで罪科を決めて居ます。幫助した者即ち横の關係も多少は取扱ひますが、遺傳や周圍の社會事情には大體に於いて觸れません。

それまで考慮に入れると、兩親にも罪が及ぶし周圍にも罪を及ぼして收拾することが出来

なくなり、却つて秩序がたまためなくなるからです。だから單なる豎の關係だけの因果論

も、社會的には決して無視したり否定したりすることは出来ない譯です。

とは云へ、それから一步出て哲學とか宗教



信仰相談

「大」で、今の言葉で申せば「元素」を云つたものですから、化學的療法であります。平く言へば「薬加減」の紹介申し上げませう。

とか言ふことになりまして、堅の關係だけでは不完全でありますから、横の關係まで考慮しなくてはならなくなります。是れ即ち「因縁」とか「縁起」とか言ふことが採用されて来る譯であります。是の故に科學を否定はしないし採用もするが、根本的な眞理とは認めて居ないことがおわかりであらうと存じます。椎尾博士から承つたことですが、佛教では病氣を治癒するに就いて、大、微、氣、心、續、組の六法を説いて居ると申すことです。之に依ると物理、化學、自然、精神、哲學、宗教等の療法を綜合して居るものであつて科學を無視して居らず、更に科學以上の方法まで考へて居ることが分りますから、簡単に御紹介申し上げます。

一、大、謂ゆる地水火風の四大などと云ふ

ことです。
二、微、極微と云ひますが、分子のことです。つまり物理療法です。手當とか看護とか此の中に入ります。

三、氣、之は一種の自然療法です。即ち「轉方」と云つて轉地することその方法ですが、それらの方法に依て病人の「氣」を轉じさせるのです。つまり今までの生活をかへ習慣を改める方法なのです。巡禮などもその一法であり、また懺悔して六根清淨を希念したり、禮拜して（體操又は運動にもなります）業障を清めたりするのも之の中に入ります。

四、心、之は「轉心」と云つて心を外の方へふり向けしめる方法です。陀羅尼を稱へるとか、念佛するとか、或は暗示法に依て轉心させるとか、色々な方法がこの中に入りますが、一番大切なことは眞實生活に入る覺悟をきめさせることです。つまり宗教信念に依て心の障をのぞき去ることです。精神病などには催眠法に依

て心を轉じかへてから信仰に入らしめるなど、往々にして行はれて居ります。五、續、續とは「續き糸」即ち因果關係を調へて行くことで、懺悔法です。懺悔することに依て現在を調へ將來をよりよくせんとするのです。

六、組、組とは「組合」のことですが、此の組合せを理論と信仰とに依て調へて行く方法です。「組合せ」とは縁のことです。此の縁を今までは「當り前」として考へても見なかつたのですが、その態度を改めて「縁とは恩なり」と觀し、如來の大生命の中に生きて居ることは恩寵でありおかげさまでであると痛感し、今後は如來様の御心に添ふやうに生活しやうと覺悟するのです。かくすればそこに「無量光」即ちあかるさが出て來ますから悩みがなくなります。

つまり一と二とは一般に行はれる方法で、謂はゞ「藥師法」ですが、四と五とは（三も若干加はります）藥師如來の信仰法で



談相仰信

あり、六に至ると阿彌陀如来への信仰へと發展して来なければならぬと云ふのです。

このやうに佛教では治病に就いても單に科學にのみ頼らず色々な方面から癒してかゝらうとして居るのであつ

て、科學がどのやうに發達しても、佛教々理は何の動搖を感じないばかりでなく、むしろ科學は發達することに依て佛教へ接近して來るものと思ひます。例へば獨逸醫學の「條件說」の如きは佛教の「緣起論」に近づいて居るやうなものです。

再び殺生について

(問)

殺生は十惡の第一に擧げてあり、念佛に志して居る者は好んで殺

生することもあるまいと思はれますが、人

畜に害をする蠅、蚊、蛇、鼠などはつい殺

してしまひます、良寛和尚は蚊を打ち殺す

音をさへ厭ふたと云ひますけれども、普通

の人には殺すのも止むを得ぬことのやうに

思はれます。また魚釣も保健、娛樂、さて

は時節柄お總菜の助けにもなり殺生罪を重

ねて居る譯ですが、かゝる殺生をどう考へ

たらよいでせうか。御教示願ひます。尙ほ

(答)

私は蚊を打つ度、蠅を叩く度には「もつと爲になるものに生れて來い」と祈りながら念佛して居ります。(神奈川・海岸人)

貴君の御質問を頂いたのちに淨土五月號が出ましたので、行違ひになつた譯ですが、五月號の「信仰相談欄」の中

の「日常生活と不殺生戒との調和」と云ふのを御覽下さつたならば、大體解決なさいま

したものと存じますが、それに補足する意味

で貴君の御質問にお答へします。

不殺生戒は生きものの命を取ることを戒し

めたものと一般に解して居ります。無論それに相違ありませんが、一體「命」と云ふのは、そのものに附與された一定の時間のことですから、蟲魚鳥獸には限らない筈で、草木にも生きる一定の時間が與へられて居りますから、私達の日常なくてはならない米麥野菜

は勿論、家を建築する材料、衣服の材料、机本箱筆紙等の身の廻りのものまでも、人間の用を足す爲に元と生きて居た草木やお蠶などを殺して居る譯です。もつと酷實して言へば

一切の時間を持つものは皆な「命あり」と云つて云へないことではないのですが、さう云ふ風に云つてしまへば一切を犠牲にする人間生活はあがきのつかないものになつてしまひま

すから、之を草木には及ぼさず、また既に死んで居るものにも及ぼさず、現在私達の眼の前に見える生きた蟲けらや生きた魚類鳥獸類を殺さないやうにと限定したのであらうと思ひます。元來は不殺生戒は「愛生」又は

「尊生」の精神からであり、また一種の人間教育なのです。理論的に云へば自分の命を殺



談相仰信

すのは「大殺生」であり、他の命を取るのはいしる「小殺生」なのです。然し「大殺生」の方は當然なことですから「小殺生」をのみ戒律でやかましく云つたのでせうが、ツイのちには唯だそれだけのやうに思ひ做されて「殺生」とさへ云へば蟲魚鳥獸を殺すことと思はれるに到つたもので、自分の命を殺すこと、即ち自殺は勿論ですが、時間を空費することの「大殺生」なる所以を忘れて、結局は生物を愛護して私達自らの「殘忍性」を養はないことが殺生戒そのものの主眼のやうになつてしまつたのでせう。然しそれもまた東洋人の美風であつて、かうした習慣は大いに尊重してよいと思ひます。

ですが、それも極端になつては謂ゆる「宋壁の仁」であつて戦争も出来ないことになりす。例へば印度人の如き極端な「愛生主義」で眼にも見えない微生物までさへ殺すまいとして雨期などは成るべ

く外出しないし、佛教徒は夏安居して全然外へ出なかつたのです。日本のやうな一年中濕氣の多い土地ではそんなことは到底出来る譯がありません。人間が乾上つてしまひます。日本などでも戒律を嚴重に守る人は蚊も殺さないし蚤などもつかまへたら竹筒の中へ入れて外へ掛けて置くやうにして居ります。之れでは蚤を飢死をさせて居るわけで、唯だ自分がひねつて一と思ひに殺さなかつたと云ふだけではないかと思ひます。然し精神は殘忍な心を養はぬ爲です。理論上からは一寸不徹底のやうに思ひます。印度人などは殊に戦争も出来ないであらうと云はれて居ります。だから無抵抗主義などがある譯です。さうかと思ふと西洋人の如きは牛を殺すこと宛かも穀物を取るごとき氣持ですから殘忍性が多く、自ら正直者を標榜する英國人などのあの外交振りは何うですか。理窟さへつけば手のひらを返すやうな不信義なことを平氣でやつてのけて居るではありませんか。シベリヤなどの泥棒は物を盜むのにまづ人を殺して置いてから

悠々と盜むと云ふことです。ですから物には程度があります。中庸を得るのが一番よいと思ひます。日本の如きは一番理想的でせう。

次に魚釣のことですが、それを職業として居る人は兎に角として（それで生活しなればならぬのですし、またそれに依つて他の大勢の人々に榮養の資料を供給して居るのですから、國民保健上からも無くてはならぬ國策的職業です）一般の人が一日の清遊としてたまになさることは差支へないと思ひますが、自分の職業をそちのけにして釣にこそが如きは少し何うかと思ひます。昔しから網打ちより釣の方が同じ殺生でも罪は輕いと云はれて居ります。餌を食べる食べないは魚の自由意志だと見て居るからでせう。然し之も理窟はつけやうです。

何れにせよ。人間は一切のお蔭なくしては一日も生きて行かれませんか、此のお蔭に對してそれに報いるだけの仕事をしなくては相濟みません。出来るだけ國の爲、人の爲に盡して行かねばならぬと思ひます。



話 實

めうかうじん
え
妙好人を得る

千 葉 寛 定

酷しい寒さも峠を越して何んとなく日射のかげに暖かさの増して来る時分が、四季を通じて病人には一番用心を要する季節なのださうである。生物にとつて最も暮し難い冬の寒さが終りかける頃、病人はその肉體のあらゆる勢力を以て闘い抜いて来ただけに、最後の敢闘を試みなければならぬのがこの季節の變り目なのである。澤幸江さんが知人の井上

みさ子さんから病氣の看護に來て欲しいと云ふ依頼を受けた時には、その病人が長い病床生活にあつたことを知つてゐただけに、フト不吉な豫感がしたのであつた。

井上みさ子さんの主人は東北郡山のある郵便局に勤める實直な人だが、結婚して二十年

にもなつて二人の間には子供がさすからず、相變らず二人だけの夫婦生活に長い病床にあつたみさ子さんが恐らく幼なじみの心易さから自分の看護に幸江さんの親切心に甘えたい氣持になつて頼んで來たのであらう。又頼まれた幸江さんは又自分の忙しいことを棚にあげて早速東京から郡山まで看護のために出掛けて行つた。

幸江さんが看護にあたつて二、三日の間は差程でもないと思つたみさ子さんの病勢が、その實案外に重く、しかも目に見えて衰えてゆく姿に、彼女の豫感が當つたやうに思はれハツと胸をつかれるのであつた。病人の方でも遂に再び立つことの出来ないのを悟つてあ

るらしく、彼女に向つて「早く迎えを得たいものだ」と繰り返しせがむと云ふ程の心境になつてゐた。しかしこうせがまれても彼女には別に手の下しやうもなく、困つたあげくに善導寺の河野大徹師に相談し、そして同師から病人のために逆修法名と阿彌陀經で白く六字名號を抜いた懸物をもらつて歸つた。

しかし幸江さんは初めの内は折角もらつたものの何うしたものかと迷つたが、病人の欲するまゝに枕もとにその阿彌陀經の懸物をかけてやつた。すると病人はこれをみて大變に喜び、今度は「どうぞお經をあげて下さい、お念佛を唱えて下さい」とせがむので、彼女は早速にお經の用意をし、努めて心靜かに低い聲で阿彌陀經を誦し、稱名を唱へてやつた。すると病人はまるで善知識から念佛を授かつてあるかのやうに、その間何んの苦痛も

訴へず睨目し、安らかに念佛を同唱し始めるのであつた。こんな具合で、彼女が暇をみては念佛し阿彌陀經を誦する聲に病人もやうやく落着いたとみえ安らかな數日を送つた。

それでも「お迎へがちつとも來ない」といふことが不思議でもあるやうに思つてゐるらしかつた。ところがある日のこと、日が暮れて家人が夕飯をすませた頃、突然病人が「お迎へが來た、佛様が澤山お迎へに來た」と云つて高聲に念佛し始めて彼女を驚かせたのであつた。彼女も病人の枕邊に座つたまま同唱念佛に一夜を過し、やうやく夜も明け始めた時分になつて病人はのぞが渴いたとみえ牛乳が欲しいと云ひ出したので、恰度配達されたばかりの牛乳を吞ませたところ、約七勾位吞んで「おいしいおいしい」と云ひ、南無阿彌陀佛」と唱へながら三度び息をついたかと思ふと、そのまゝ息が絶えてしまつた。



折から丁度登り始めた太陽の光が窓硝子にあたり、急に明るくなつた部屋の中に座つたままの彼女は、今しがたこの日の光りをみずに極樂往生の旅を急いしまつたみさ子さんの顔を眺めながら、改めて別な感激をおぼえるのであつた。彼女はこれまで臨終の人に接

したこともあつたけれど、こんなに安心し切つて然も至心に淨土を欣求しつゝ命終した人は誠に珍しいし、うらやましい人であると思はれ、故人が現代教育をうけて未だ四十二歳と云ふ若いインテリ婦人であつただけ、こんなに安らかな往生を遂げたことが今まで氣のつかなかつた故人の半面を知ることが出来たやうにも思はれて、今現に目の前で息が絶えたばかりにも拘らず、いまにも又息をふきかへし、硬ばつた口もとから再びお念佛が唱へ出されさうな氣がして、故人の遺骸と自分とこうして向ひ合つてゐる姿がそのまゝにある世とこの世との較べものでもあるかのやうな氣がするのであつた。彼女の乳姉妹といふ幼なじみを失つたといふよりは實に得難い妙好人を得たといふ感じの方が強かつた。息の絶えるまでは彼女が導いて念佛を申させたのに、今は故人に誘はれて唱えるかのやうに、後から後から自然とお念佛が口をついて出るのであつた。

會 員 通 信

會の飛躍的發展と
教化報國の運動に

具體策を協議す

本會では昨年度の會計決算、豫算案並に今後の運動實踐について協議するため去る六月二十一日午後二時半から明照會館樓上に於て理事會を開催しました。

會長の挨拶

先づ會長里見達雄師から挨拶がありました。同師は本會が創立七週年を迎へて、その確固たる基礎と教化運動の成果とは他の教界に比類のないものであるが、今後更に飛躍的發展を期して努力し、以て本會の運動が淨土宗は勿論のことその他各方面から多大の期待

協議事項

をかけられてゐるのに對し報ゆるつもりであると述べました。次いで左の如き協議事項についての協議に入りました。

昭和十五年年度のいろ／＼な事業の経過報告

昭和十五年年度會計決算報告

昭和十六年度豫算案

法然上人を讃仰する運動の徹底と擴張に關する件

運動實踐の指向に關する件

本誌「淨土」の編輯に關する件

その前に理事長中村辨康師から

各協議事項について逐一説明がありました。昨年度の諸事業の経過報告、十五年度會計決算報告及び十六年度豫算案については、そのまゝ全部承認されました。次いで今後の本會活動の實際を協議する他の三件については出席各理事からいろ／＼と意見が申し述べられ、眞摯な協議が続けられました。結局次のやうなことに意見の一致をみました。

本會發展の方策

淨土宗々侶は法然上人の御遺徳を讃仰することの意義を解して、一寺院一支部を目標に會員の増加に努めること、そして毎月一回支部の誌友會を催して、和やかな信仰の集ひを開くこと。

また會員各位は少なくとも一名づゝ新しい會員を紹介して下さ

教化報國の徹底

れ、會の發展に協力して下さるやうお願いすること。

淨土宗立の各學校が積極的に協力し、特に陸海軍病院に毎月送つてゐる慰問淨土の資金調達に努めること。

更に他宗派にも廣く呼びかけ、法然上人の御遺徳宣揚に努め、これがために宗務當局も協力して下さること。

これまでの本會活動の中心は法然上人の御遺徳宣揚であり、從つてお念佛によるわれわれの生活規範を作ることであり、教化報國に誠をつくすことであるのは勿論ですが、これからもつと具體的に淨土宗報國會と密接な聯繫を保つて、同報國會の事業の一翼となつてお國のために盡すこと。これが

實際については報國會各支部と直接連絡をして協力すること。

また會員各位には自分の周囲の人々や隣家の人々にお念佛による生活をすゝめていたゞき、職域奉公に完璧を期していたゞくこと。又本誌「淨土」の編輯には右のやうな諸意見を實現してゆくやうに考慮して編輯事務に當ること。

出席者氏名

因に當日の出席者の氏名は次の通りであります。

會長 里見 達雄
理事 中村 辨康
理事 石塚龍學、大村桂藏
理事 福田有誠、安井大學、栗本俊道、佐藤良智、赤尾光雄、稻田稔界

本部側 主事 佐藤賢順、辻重光、道瀬幸雄、村瀬秀雄

淨土宗報國會

と提携し宗教報國に邁進

淨土宗報國會が結成され、宗教報國の實を擧げることとなり、各府縣の教區ではそれぞれ同會支部の結成を急ぎ東京教區の如くすでに支部結成をみたものもあり、その他の教區でも遅くとも來る十月までには全部支部結成が完了する筈であります。そして別項本會理事會の席上でも本會と報國會とが手を握つてとも、宗教報國の誠をいたすやうにとの意見があり、また一方報國會の方でも是非とも本會と協力しようとの希望が有力になつてゐます。そこで近く續々と結成される報國會支部と連絡をして、同じ目的である宗教報國に盡力することになりました。

中村辨康著

刊近 日常勤行式講讚

B 6 判二〇〇餘頁

定價一圓五十錢(豫定)

これまで會員各位から手頃な、「おつとめ」の本が欲しいといふ希望が澤山ありましたが、今度誰にでも向くお經の本として中村辨康師著「日常勤行式講讚」を刊行することになりました。同書は淨土宗のおつとめに用ふるお經文を全部納めてあり、誰にも解るやうに一々懇切な解説がついてゐます。従つて會員各位の御佛壇にこの一書を供へて讀誦すれば、修養に最適です。また宗侶各位にはこの一書を書架に加へられ、修養の參考資料とすると同時に、説教その他の教材として最も適當なものと存じます。同書は只今印刷を急いでゐますので今から御期待願ひます。

文學博士山本幹夫著
法然佛教と

わが國體思想

A 5 版一八〇頁

定價二圓二十錢

「本書」は題名の示すやうに法然上人が「わが國ならではと思はしめる新宗を開創」されたところの、法然佛教とわが國體思想について、著者の雜著をかたむけ、餘すところなく解説したものです。本書の豫約申込みが殺到しましたが、製本が豫定より遅れましたことをお詫びします。



われらの

覺 醒

福田有誠

×

一代の法をよくよく學すとも、一文不知の愚鈍の身になって尼入道の無智の輩に同ふして、智者の振舞ひをせずして、ただ一向に念佛すべし

この言葉は申すまでもなく宗祖法然上人の御遺訓たる一枚起請文の一節である。

上人はこのやうにお教へ下さつたばかりでなく、御自分で自らを愚鈍愚痴の法然坊なりと仰せられ、そして唯一向に念佛の一行をば、専修せられたのである。

×

このことについて念佛信者の京大法學部教授某博士が疑問をいただき、淨土宗の高僧方に質問したことがある。その疑問と云ふのは、法然上人ほどの學德兼備の偉ひ方が、如何に自分からは愚痴愚鈍であると卑下され、ひたすらに愚鈍念佛に専念されたと申さるゝが何うも眞から愚痴にかへられるものではな

方に質問されたが、何れも満足がゆくやうな説明をしてくれたお方がなかつた。

×

それから確京都黒谷の金戒光明寺の授戒會の時であつたと思ふが、右の某博士がその時の勸戒師某上人に同じやうな質問をされたところ、その上人はそれに答へて次のやうに説かれたのである。

例へばここに一つの瓶があつて、その瓶に水が充滿してゐる時と、中位に這入つてゐる時と、それから全く空になつてゐる時の三通りを考へて御覽なさい。若し水が瓶に一杯になつてゐる時には振つてゐても音がしません。又空になつてゐる時も亦振つても音がしません。ところがかへつて中位に水が這入つてゐる方が、振ればポチャポチャと音をたてて、一寸手ごたへのある感じがします。

だがそこで。學德兼備の大偉人ならば、徒らに自慢の音を出さぬもの、また全然空で學もなく智もない者ならこれのみだりに

音を出せぬ筈です。しかるに中位の半可通の徒輩は、とかくに勝手な自我論を以て押し通さうとし、上の意見を難じ、下の言葉を卑しめ、そして結局は自分も何等悟るところが出来ないといふ憫れな輩であつて、全く世道人心に何等裨益するところのない無益の徒といはねばなりません。

このやうな意味で、法然上人はご自分の出離解脱の御修行ばかりでなく、その餘力を以て、迷ふてゐる世の所謂空瓶黨の人々を化益されるために愚鈍愚痴の法然坊となられ、そしてこの愚痴の空瓶通に仲間入りして、ともどもに御念佛修行をなされたのであります。

このやうに説き聞かされた某博士は、愚痴の法然といふことも、愚鈍の念佛の意義も、判然悟り得て、ます／＼信仰を深められたといふことである。

愚生もこの話を聞いて、念佛修行をするわれわれはほんとに左様でなければならぬと深く感銘恐懼してゐる次第である。

×

このことは、ただ遠い七百餘年前の昔話として聴き流してはならぬ。これを今の時代に當て嵌めて見るなら、恰度初等學校の先生の様なものである。先生方は、何れも相當の學識を備へて居らるゝ人々ながら、しかも幼稚園の生徒には、はとほつぽうと一緒に唱ひ一年生には、いろはから段々に教へると云ふやうに、少しも面倒がらずに、全く愚鈍の様になつて、子供達の優さしい好い友達になりきつてゐる。何から何まで親切に世話をし、時には、我儘不勉強の者には、きつい小言も云ふて聞かせて、矯正するなど、本當に親以上の氣持にもなつて、訓導される。だからこそ生徒たちは、両親よりも先生の方が、遙かに偉く、尊く見え、眞に親しみを感じて、知らず知らずの間に善導感化されて行くのである。

×

もとより法然上人は學徳圓滿の大聖人であられるから、世の半可通者の、苟くも佛意に

あゝ老少不定

花田 順 往

人の世の常なき理はりは豫てより知る處なれ共、とかく凡夫の習ひとして我が身近くに起らぬうちは、餘所吹く風と氣にも留めず、昨日も空しく他の死を弔ひ、今日も徒らに人の歎きを聞き、曾て我宗祖明照大師が「人の死を見て無常の理りを悟れ」との給ひしを、餘所事の如く過こし來たりしも實に慚愧の至りなり。

願れば、去年の春、健康優等にて學窓を出でし我子よし子が、本年一月末つ方、姉に誘はれ空知郡歌志内町の炭礦會社に勤むる事となりて行かれしが、勤務わづかに三月ばかりにて、圖らずも病魔の犯す處となり、去る四月三十日午後二時半頃、炭礦病院に於て、十八歳を一期として、眠るが如く正念に往生し、死相いかにも笑めるが如しと聞けど、遂に歸らぬ身となりしかと思へば、在りし世

反し、世人を損ふ如き徒輩に對しては、斷乎之を説伏し、又この大勇猛心の半面に、至らざる愚痴の輩に對しては、身をくだされて、恰も慈父の如き態度で親しみ合はれる。そしてともどもに愚鈍念佛の修行の中に、迷ふて居る人々に、其の歸趣を判然と御示しなされて、寔に此の世からなる安養淨土を具現し給ふたのである。

實に偉大なる哉、我が宗祖法然上人と、遍く瞻仰し奉らるゝのも、決して偶然ではない。

×

現下の古今未曾有の大國難に際し、物心共に大切ながら、特に國民を擧げて、確乎不動の指導的精神修養の必要を、根本的に叫ばれて居る秋にあたり、政治家宗教家教育家はもとより所有階級が、法然上人が身を以て御示めしなされたやうな精神を以て、上下賢愚相共に一致團結してゆかねばならぬ。隣組やその他の世道機關を利用して、臨機應變、上に立つ者は下を指導し、下は能くその指導方針

を遵守し、互ひに教へ合ひ扶け合ひ、正しい進路に向つて精進し、一億一心、總心總和、各々其の職域を通つて、所謂滅私奉公の眞實心を發揮するならば、物心共に、自から完備し、大政翼賛、臣道實踐も、期せずして果し得て、如何なる大國難をも乗り越え、押し切ることも容易である。

かくてわれ／＼は、恐れ多くも、陛下の御聖旨に添ひ奉るやう、皇戰を遂行し、東洋否、世界永遠の平和、新秩序樹立の大目的を完遂し、八紘一宇、皇國の大精神をば、彌が上にも發揚し、萬民をして、眞の王道樂土に、安住せしむる様、期すべきである。是を要するに、出家在家を問はず、法然上人のこの生きた愚鈍念佛の御遺訓を體得し、よりよくこれを生かして實行し、身心の鍛錬に資し、實に現當二世の「成佛國土、成就衆生」の確立を期して、専心に精進努力すべく、希望して已まぬ次第である。

のこと共思ひいたされて、かくなん愚痴を漏らしける。

巢立ちせしひなにも似たるなれが身も

やみて空しくなりにけるかな

これも世の習ひとしれと咲きそめし

花のあらしに散るぞおしけれ

再會を約していそいそとして行かれしものが今は早や現世にて二度と逢はれぬ身となり

しかと思ひば

かりそめに別れし汝も今は世に

永く逢はれぬ身となりにけり

曾ては晝道を好みてその道に親しまれしも

若き身の猶は將來を期すべしとてさのみ心にとめざりしが

今更らに心して見るありし世に

汝がしたしみし水ぎのあと

我れ又老いたり近き未來に如來の引接を待ちて稱名念佛を勵むのみ。

やがて行く老を待たれよ御佛の

みもとにありて道修めつつ

嗚呼老少不定眞に身にしてみておぼゆ。

聖典
講義

観相のむづかしさ

— 観無量壽經眞身觀(その二) —

中村 辨 康

(二)

眞身觀に至るまでの觀法

韋提希夫人みだけ けふじんが釋尊しやくそんにお願ねがひしたのは、現實げじつの姿すがたが餘りにも苦くるしく悲かなしいところから、十方佛土じふぱうどの中、特に阿彌陀佛あみだぶつの淨土じやうどを欣ねがひ求めたのであります。

然しかしなぞ彌陀みだの淨土じやうどを特に求めたかと云いふに、善導大ぜんだうだい師しに依よれば、

彌陀みだの大智大悲だいぢだいひは諸佛しよぶつに立ち勝まさつたものであり、凡てのものをおまさす救すくつて下さるから、韋提希みだけの心を導みちいて彌陀みだの淨土じやうどを欣求きんぐせしめたのだとのことであります。

それでまづ初はつめに彌陀みだの淨土じやうどの内容ないようや形態けいたいを知らしめて一層欣求きんぐの心を増まさしめやうと思召おもめされるのですが、

韋提希みだけや未來みらいの衆生しゆじやうは元もとより凡夫ぼんぷであつて、自ら淨境じやうきやうを見得みる力ちからがありませんから、特別な方法とくべつ ほうほうを用もちひて淨土じやうどを觀察くわんさつせしめやうとなさつたのでした。それがつまり「定善十三觀じやうぜん じふさん かん」と云いはれるものですが、それもまた散亂粗動さんらんそどうの心をもつ人達の堪たへ得えるところでありませんから、釋尊しやくそん自らの大慈悲心だいじひしんから「三福九品さんぷく くにん」を説とき、就中すなはち「念佛ねんぶつ」の一行いっぎやうを力説りきせつなさつたのが「散善三觀さんぜんさんかん」で、それを以て「淨業じやうぎふを成就じやうじゆする」ものとして居ゐるのであります。

そしてその定善十三觀じやうぜん じふさん かんと云いふのは

初 はつめ	觀 かん	日 にち	想 さう	觀 かん
第二 だいじ	觀 かん	水 すい	想 さう	觀 かん
第三 だいさん	觀 かん	地 ち	想 さう	觀 かん

第十四觀	寶樹觀	依報
第十五觀	寶池觀	
第十六觀	寶樓觀	
第十七觀	華座觀	
第十八觀	像想觀	
第十九觀	眞身觀	
第二十觀	觀音觀	正報
第二十一觀	勢至觀	
第二十二觀	普賢觀	
第二十三觀	雜想觀	

であります。

初めの日想觀と水想觀とは一種の準備行動で、善導大師は「初めに日觀を教へて昏闇を除かしめ、水を想ふて水となして內心を淨む」と教へて居られます。

かくの如くして漸次に定心を調へて行くと同時にいよいよ觀の内容も復雜になつて行きます。この地想觀の半から極樂の琉璃地を觀することゝなり、それから寶樹、寶池、寶樓と大體淨土の有様を概觀し了りますと、經典は突如として阿彌陀佛及び觀音勢至の二菩薩が空中に現はれ玉ふたことを説いて居ります。これは影像であつて眞

身の如來様ではないのでせう。元より私の如き凡夫が經典の眞意を忖度し得る限りではなく、且つそれは非禮極まることでありますけれども、韋提希夫人が阿彌陀佛及び二菩薩を見奉つて接足作禮しながらも、直接に阿彌陀佛にお願ひはせず、釋尊に向つて

「私は今ま佛力に依て三尊の佛様を見奉ることが出来ましたが、未來の衆生は如何にしたら三尊の佛様を見奉ることが出来るでせうか」

とお質ねして居るところから察しますと、恐らくは影現の如來様ではないかと思はれます。

然しながら、佛身に異りはないのですから、信行的には敢へて問題ではありませんまい。

善導大師は

「娑婆の化主(釋尊)は物(衆生)の爲の故に想ひを西方に住せしめ、安樂(淨土)の慈尊(阿彌陀佛)は情を知り玉ふが故に、則ち東域(娑婆)に影臨し玉ふことを明す。斯れ乃ち二尊の許應異なることなし。直だこれ隱顯特なるあり。正しく器朴(才能質實)の類萬差なるに由て互ひに器匠(實質)をきづつけずして、正しくする人たらしむることを致す」

と言つて居るのを見ても明らかであります。

そこで釋尊の説法は觀佛に依て見佛すべき方法へと移るのですが、そのまた準備として華座觀と像觀とを説かれます。

善導大師はその「華座觀」の初めに次のやうなことを云つて居ります。御参考までに御紹介しますと

「諸の行者等、先づ佛像の前に於て至心に懺悔して所造の罪を發露し、極めて慚愧(の心)を生じ慈泣して涙を流すべし。

懺悔すでに意てまた心と口に釋迦佛十方恒沙等の佛を請し、又た彼の彌陀の本願を念じて言へ。

弟子某甲等、生盲にして罪重く障り深し。願はくば佛の慈悲攝取護念して指授開悟せしめ玉へ。所觀の境、願はくば成就することを得ん。今ま頓に身命を捨て、仰いで彌陀に屬す。見ると見ざるとは皆な是れ佛恩力なり。

と。此の語をいひおはつて復更に至心に懺悔し意する。

已りなば即ち靜處に向つて面を西方へ向へ。正坐跏趺すること、もつばら前の法に同じ。

既に心を住し已りなば、徐々として心を轉じて彼の寶

地の雜色分明なるを想へ。初想には多境を亂想することを得ざれ。即ち定を得ること難し。

唯だ方寸一尺等を觀ぜよ。或は一日二日三日或は四五六七日或是一年二三年等、日夜を問ふことなく、行住坐臥、身口意業、常に定と合せよ。唯だ萬事を俱に捨て、失意瞋盲痴人の如くなる者は、此の定必ず即ち得易し。若しかくの如くならざれば三業、緣に隨つて轉じ、定想、波を逐て飛ばん。たとひ千年の壽を盡すとも法眼未だ開けず。若し心に定を得る時は或は先づ明相の現することあり、或は先づ寶池等の種々の分明なる不思議のものを見るべし。

二種の見あり。

一には相見猶ほ知覺あるがごとし。淨境を見ると雖も未だ多く明了ならず。

二には若し内外の覺滅して即ち正受三昧に入れば所見の淨境即ち想見にあらず、比較することを得んや」と云ふのですが、中々容易のことではありません。さればこそ法然上人も

「近來の行人觀法をなすことなかれ。佛像を觀ずとも、運慶康慶が造りたる佛ほどだにも觀じあらはすべ

からず。極樂の莊嚴を觀ずとも櫻梅桃李の花果ほども觀じあらはさんこと難かるべし。たゞ彼佛今現在世成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生の釋を信じて本願をたのみて一向に名號を唱ふべし。名號を唱ふれば三心おのづからは是足するなり」

と云つて居られるのです。

これは善導大師も既に認めて居られるのでせう。次の像想觀の中で

「諸佛如來は是れ法界身なり。一切衆生の心想の中に入る。この故に、汝ら心に佛を想ふとき、是の心即ち是れ三十二相八十隨形好なり。是の心佛を作る。是のころ是佛なり云々」

の句に對して、諸宗では「唯心の彌陀、己心の淨土」などと色々に解釋して居るが、自分の見解は

「唯だ方も指し相を立てゝ心を住めて境を取らしむ。

總じて無相離念を明さざるなり。如來ははるかに、末代罪濁の凡夫の、相を立てゝ心に住するすら尙ほ得ること能はず、いかに況んや相を離れて事を求めば、術通なき人の、空に居して舍を立てんが如しと知り玉ふなり云々」

と云はれ、凡夫には觀相することの困難なことを洩されて居ります。

以上は、觀經の第八觀までの概略でありまして、是れからいよゝ「眞身觀」となるのですが、一々の觀法そのものに就いてはわざと申し上げませんでした。それは此の講説の目的が阿彌陀佛を觀する方法としてではなく、阿彌陀佛に對する私達の認識を深める爲に、此の觀無量壽經の一節「眞身觀文」をお借りしたに過ぎないからであります。

此のことは豫めお間違ひのないやうに特に御願ひしたうございます。

従つて經文に直接的ではないかも知れません。その邊はおゆるし下さい。

(三) 本文の和譯

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、此の想、成じをばりなば、次にまさに、更に無量壽佛の身相光明を觀すべし。

阿難まさに知るべし。

無量壽佛の身は百千萬億の夜摩天の閻浮檀金の色のご

とし。

佛身の高さ、六十萬億那由他恒河沙由旬なり。

眉間の白毫は右に旋りて婉轉せり。五須彌山のごとし。

佛眼は四大海水のごとし。青白分明なり。身の

諸の毛孔より光明を演出すること須彌山の如し。彼

の佛の圓光は百億三千大千世界のごとし。圓光の中に

於て百萬億那由他恒河沙の化佛あり。一一の化佛にま

た衆多無數の化菩薩ありて以て侍者とせり。

無量壽佛に八萬四千の相あり。一一の相におのゝ八

萬四千の隨形好あり。一一の好にまた八萬四千の光明

あり。一一の光明あまねく十方世界を照らして念佛の

衆生を攝取して捨てたまはず。

その光明相好および化佛、具さに説くべからず。

たゞまさに憶想して心眼をして見せしむべし。

此の事を見る者は即ち十方一切の諸佛を見奉る。諸

佛を見たてまつるを以ての故に、念佛三昧と名づく。

是の觀を作すをば一切の佛身を觀すと名づく。佛身を

觀するを以てのゆゑにまた佛心を見る。佛心とは大慈

悲是なり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝したまふ。

此の觀を作さん者は、身を他世に捨て、諸佛の前に生

じて無生忍を得ん。

是の故に智者まさに心を繫けて諦かに無量壽佛を觀す

べし。無量壽佛を觀ぜん者は一の相好より入れ。たゞ

眉間の白毫を觀じて極めて明了ならしめよ。眉間の白

毫を見たてまつる者には八萬四千の相好、自然にまさ

に現すべし。無量壽佛を見たてまつる者は十方無量の

諸佛を見たてまつる。無量の諸佛を見ることを得るが

故に、諸佛、現前に授記したまふ。

是を徧く一切の(佛の)色身を觀するの想となし、第

九の觀と名づく。

此の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀する

をば名づけて邪觀とす。

(一)又は(イ)等の記號は善導大師の分科なり(定善義)

(字解)

夜摩天。須夜摩、焰摩、醯等と云ひ、善時分、善時、

時分などと譯し、離淨天とも云ふ。

元來印度民族が吠陀以來信じて來た死後の理

想的光明世界であつて憧憬的になつて居た

所である。光明赫奕として晝夜なく但た花の

開合を以て時を分つから、それに因んで名づ

けられたとのことである。歡樂極まりなく、夫婦生活をなし、壽命は人間の時間、で云ふと、一四六〇〇〇、〇〇〇歳で、身長は二由旬なりと、また天王の身長は五由旬なりとも云ふ後世、死人の審判者として考へられ、居所は上層の空中ではあるが地獄の主となつて、閻魔王とも稱せられる。また佛教に混入するに至つて六欲天の第三位に置かれたので、第三炎天とも云ふ。

閻浮檀金

閻浮は樹の名、檀は捺陀で江の義、故に「閻浮河の金」と云ふ意なり。印度神話中の恒河七支流の一に「閻浮河」あり、そこに閻浮樹あり、河中より金出づ。河の名は樹名に依り、金の名は河名に依ると云ふ。而して其金の色は赤黄色に紫閻氣を帯ぶと、然るに閻浮樹の實は初め黄色、漸次橙赤紫色に變じ、熟するに及んで黒色を帯び深紫色となると云ふから、その類似色に依つて黒紫色の金を「閻浮檀金」と名づけたものかとも考へらる。かの善光寺如來は閻浮檀金と稱せられる。

那由佗

由旬

が、後春は黄金色、三尊は黒紫色である。以て考ふべきであらう。

望月博士の辭典に依れば「印度は閻浮樹の茂盛する地なるを以て閻浮提の名を得、且つ此の樹の茂盛せる間を流るゝ諸河は沙金に富むを以て云々」と云つて居るから、或は印度產出の沙金そのものを指して云つたものかとも考へられる。

數の名、俱舍論の説に依ると十萬を洛叉即ち億とし百萬洛叉を以て一那由佗とすると云ふから日本の千億に相當する數である。

里程の名、二頭の牝牛が滿載した車を曳き得る一日の里數なりと云ふ。諸説ありて定かではないけれども、古くは四十支里又は三十支里として居る（一支里は六町）、若し一町を日本の三十六間として計算すると十五哩七強となるが、フリート氏は印度の長さの基礎である一吋を半碼として由旬を計算する三十里の一由旬は九・〇九哩、四十里の一由旬を一・二・一二哩になるとのことである。尙ほ一吋

須彌山。

を半碼強となす説もある。

蘇迷盧とも云ひ妙高(光)山と譯す。一世界の中央に屹立つる大高山で、海水の中に入るものと八萬四千由旬、海水の上に出づること八萬四千由旬、或は各々八萬由旬とも云ふ。之を中心にして八大海八大山ありて順次に圍繞し、最後の外廓を鐵圍山と云ふ、直徑十二億二千八百二十五由旬、水際周廻四十六億八千四百七十五由旬とのこと。

また此鐵圍山の内海なる第八海中にあるを須彌の四州と云ふ。

四大海水。須彌山の第一大海の廣さ八萬四千由旬だから、東西南北の四を合すれば三十三萬六千由旬である。

今はその廣さに就いて云ふ。

三千大千世界。一須彌山世界の千倍を小千世界とし、

小千世界の千倍を中千世界とし、中千世界の千倍を三千大千世界とする。大宇宙の廣大なるに譬へたもの。

隨形好。

佛身及び轉輪聖王身に具へた三十二種の妙相

授記。

無生忍。

を「三十二相」と云ひ、それに附隨する八十種の好相を「八十種好」と云ふ。八十種好は佛菩薩のみに限られる相である。兩手足の指、節、爪に關するもの二十種、兩手足の表裏にあるもの八種、兩の踝、膝、股にあるもの六種、兩の臂肘、腕にあるもの六種、其他身體にあるもの二十種、頸より上にあるもの二十種、合して八十種なり。

今までの隨形好とは一々の相に附隨せる好相のことである。

無生法忍とも云ふ。諸法の無生無滅の理を認得した心證のことで、無量壽經の「第一第二第三法忍」とある第三忍と同じものである。

璣珞經では菩薩十住位と云ひ、華嚴經では十信位と云つて居る。

記決又は記別(筭にも作る)とも云ひ、後世成佛すべき保證を與へられることであるが、梵語學では「分離す」の語より來たものだといふ。

編輯後記

◇山に海に強烈な太陽の光がわれわれを鍛へてくれます。身體の訓練に、心の修養にこの季節が最も適してゐます。

◇夏の戦場で下痢にかゝると、水を一切断ち、思ひきり働いて汗をしばつてしまへばすぐ癒つてしまふと、ある人が話してくれました。

◇やけた土の上に跳で跳けまわつてゐる子供をみると、まるで暑さを知らないやうな元氣さです。

◇机に向つてゐると額から汗が流れ落ちて來ます。この汗を拭きもしないで仕事に専念する氣持は、嬉しく誇らしげなものです。

◇夏に「暑い」と愚痴るのは勿體ないことです。このやうな人は何れの季節でもきつと愚痴を云ふ人なのです。

◇暑きは暑さで喜び、寒さは寒さで喜ぶ、これがお念佛を申して暮す人の一面でせう。

◇自分が修養することは、自己だけの萬徳圓滿を目指し、それに近づくこと云ふことだけではありません。自分が修養することは即ち社會が修養してゐることになります。

◇民族の向上には歴史を必要とするのも、長い間かゝつて一人一人が修養してこそ、初めて向上が現れるからです。努力を忘れた民族が置き去りになるのは當然のこととせう。

◇少しでも油斷をすれば、すぐそれだけ民族の素質が落ちて來ます。そして結局は素質の高い民族が勝利を得ます。歴史の示す民族興亡のあとに、油斷と驕慢の恐るべきことを物語つてゐます。

◇吉田雄二郎先生から玉稿をいただいたき深謝いたします。

◇和田正系博士から久し振りに玉稿を頂戴しました。人生は所詮巡禮である」とのお話は博士の實感を最も率直に云ひ現したものでせう。

◇望月信成氏は佛教美術を専攻する新進學徒です。

◇別項の通り先般理事會が開かれ、席上各理事から本會の事業や會員獲得について御激勵をいただきました。會員各位も何卒一名づつの新會員を御紹介下され、本會の發展に御協力下さるやうお願いいたします。

◇書籍を御註文の場合には、勝手から代金引替は一切お断り申してゐますので、葉書での御註文は御容謝下さい。

◇何かお氣づきのこと、或ひは御希望がありましたら、ドシ／＼編輯部まで御申越し下されたく、少しでも會をよくしてゆきたいと存じます。

淨土 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年七月五日印刷納本
昭和七年八月一日發行

廣島文理科大学教授
文學博士

山本幹夫著

新刊

法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛

教を歴史的に解明す。時局下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つて初めて萬民翼賛の教法として
現れ大成されるまでを總ゆる資料により解明されてゐる。

先づ日本佛教と日本國體とを中心にして、神國日本の教法として
佛教が展開し來つた史的實相を示す本書こそ、淨土教徒のみなら
ず廣く萬人の知らんとするところである。わが國ならではと思は
しめる新宗の開創の根據を説いて餘りなし

わが國體思想からみな

法然佛教の新しい基礎づけ

A5型クロース装箱入
價 二圓二十錢
送料 十錢
會員に限り
送料當方負擔

目次

序論

- 一、法然佛教の前提
- 二、法然佛教の機構

本論

第一編 日本と日本佛教

- 三、神の國と人の國
- 四、神道と佛法
- 五、天照大御神
- 六、祭政・教一如
- 七、國體と國民道德と教學
- 八、肉身的と法身的

第二編 日本佛教の展開

- 九、佛教の公傳以前
 - 一〇、佛教公傳紀とその背景
 - 一一、日本佛教の發足
 - 一二、十七條憲法
 - 一三、日本佛教の原理
 - 一四、國家佛教
 - 一五、國家佛教の内外
 - 一六、平安佛教の歸納
- ### 第三編
- 一六、法然佛教序觀
 - 一七、新宗開創
 - 一八、法然上人の宗教體系
 - 一九、選擇本願念佛
 - 二〇、平等の慈悲
 - 二一、萬民翼賛の教法

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年八月廿日印刷納本 昭和十六年九月一日發行

淨土 第七卷 第九號

定價 金十二錢（送料）
（郵） 金十三錢
外地定價 金十三錢

振替東京芝區芝公園明照會館
番七八一二八

發行所 法然上人鑽仰會